戦姫絶唱シンフォギア＋ ～それでも、前を向く～

まどるちぇ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

天羽　奏の死から2年。奏の従弟である天城　翔（あまぎ　かける）は、奏の死を受け止めきれずにいた。

そんな中、翔はとある事件に巻き込まれ、奏の死の真相を告げられる……。真実を知った翔が取る行動は、復讐か、それとも……？

女の子達の闘いに、ちょいと男がお邪魔します。

今日も明るくドタバタラブコメディ、はじめました。

目次

序章　悲しくても、前を向く ―― 1
第1章　恨んでも、前を向く ―― 5
第2章　捕まっても、前を向く ―― 11
第3章　学校でも、前を向く ―― 24
第4章　異質でも、前を向く ―― 39
第5章　嘘つきでも、前を向く ―― 50
第6章　弱くても、前を向く ―― 61

序章　悲しくても、前を向く

それでも、前を向け。
俺の従姉、天羽　奏が俺にいつも言っていた言葉だ。
友達と喧嘩した時も、家出をした時も、大好きな祖母を亡くした時も、告ってフラれた時も。
いつだって奏姉は言ってくれたんだ。それでも、前を向けって。
なあ、奏姉。俺は、奏姉がいなくなっても前を向かなきゃいけないのかな？

☆

「……」
告別式。喪服に身を包んだ人々が或いは泣き、或いは泣いている人の肩を抱きながら泣き、一人の少女の遺影の前に座っていた。空も少女の死を悼むように惜しみない涙を流している。
その少女の名は天羽　奏。大人気アイドルユニット【ツヴァイウイング】の一人だ。
鬱屈とした雰囲気の中、一人の少年はくすんだ瞳で遺影を眺めていた。
少年の名は天城　翔（あまぎ　かける）。今年中学生になる１３歳の少年だ。奏とは従姉妹の関係で、昔はよく一緒に遊んでいた。学生服を喪服代わりに着て、翔はじっと奏の遺影を見つめていた。隣では母親がさめざめと泣いている。
「……なんで」
翔は何時間ぶりになるかの声を出す。ピッタリ張り付いた唇と喉を押し広げ、掠れた声を。
「なんで奏姉が死ななきゃいけなかったんだよ……」
憤りや憎悪はある。しかしそれ以上に、翔の口から出るのはため息と悲痛な訴えだけだった。

「なんでだよ。なんで……」
怒鳴る気力も無かった。ただただ目の前の現実を飲み込まないように咀嚼し続けることしかできないでいた。
「翔。奏ちゃんはね、他の人を助けて死んでいったのよ。とても立派な死に方だったのよ……」
翔の母が半ば自分に言い聞かせるように言った。
「立派に死ぬより、惨めでも生きてて欲しかったよ……俺は」
そう言って、翔は立ち上がった。そのまま誰にも何も告げずに式場を出て行く。
「翔……」
「今はそっとしておいてあげなさい」
親族の誰かが母親を宥めた。

☆

「……」
翔は無言のまま式場の周りを歩いた。雨に濡れないように、屋根のあるところを歩く。
奏の実家ではなく斎場なのは、奏の両親も数年前に亡くなっており、奏はその時からどこかの施設で生活していたからだ。
「こんな……もののために」
翔はペンダントを外した。ペンダントの先には瑪瑙らしき赤色の勾玉状の石が付けられていた。
発掘作業の合間に奏に会いに行った時、綺麗だからと奏が自分への手土産にしてくれた。
「くそっ！こんな……こんな！」
翔は湧き上がる怒りをペンダントに込めて投げようとした。
『それ、大事にしてくれよな！』
「ッ！」
当時の奏の声が頭に響き、翔は投げる手を止めた。
「畜生……！どうすりゃいいんだよ？俺は、これから何を目標に生き

ていけばいいんだよ!?」
翔は力無く膝を折った。
奏は、翔の目標だった。強く、明るく、どこまでも澄んだ目をしていた奏。そんな奏の背中を、翔は大きいと思った。
前に口にしたら怒られたのでもう言わないが、翔はその背中の大きさを知っていた。
「奏姉……」
石を握り、奏との思い出を反芻する。楽しい思い出、辛い思い出。たくさんの思い出が頭を駆け巡る中で、心に残る言葉は一つだけ。
「それでも、前を向け、か……」
翔は呟くように言った。生前、奏が何度も自分にかけてくれた励ましの言葉。
「それでも、前を向け……」
翔は何度も呟いた。不思議と、体に力が戻るのを感じた。
(奏姉はもういない。俺の目標だったのに。ずっと、俺のこと見ていて欲しかった)
「それでも、前を向け」
(いつかその背中を押せるような、強い男になりたかった。それなのに、もうその背中を見ることはできないんだ……)
「それでも、前を向け!」
(俺は、明日から何を目標に生きていけばいいのか、見失ってしまった)
「それでも……」
拳を握る。骨が軋む程、強く、強く。
「それでも、前を向けッ!!」
翔は勢い良く立ち上がった。誰もいない式場の外れで叫ぶ。
『そうだ。それでいい』
奏に以前言われた言葉を思い出し、胸に刻むように拳で胸を叩いた。
『私は、まだお前の前にいてやるぞ』
奏の声が、怒りや憎しみを取り除いていく。

「天城　翔、完全復活だぜ！」
天に向かってピースサインを送る。
雨は、いつの間にか止んでいた。

第1章　恨んでも、前を向く

奏の死から2年が経った。
翔は高校一年生になり、都内の高校に通っていた。
成績も良く、学年で十指に入る実力だった。スポーツも頑張っており、未経験ながらバレーボール部で毎日練習に明け暮れている。
あと、ちょっとモテる。
「すいません！俺ここで上がります！」
翔は練習を切り上げ、顧問に挨拶する。
「おう、珍しいな。どっか痛めたか？」
「いえ。今日はこの後法事があるんですよ」
翔は少し翳りのある顔で答えた。
「おお、そうか。それじゃあ仕方ないな。ちゃんとクールダウンとストレッチ忘れんなよ！」
「はい！失礼します！」
仲間と顧問にお辞儀をして、翔は体育館を出た。
勢いよく更衣室まで走っていた翔だったが、少しずつペースが落ち、やがて立ち止まってしまった。
「……あれから2年か」
翔は空を見上げた。あのペンダントは、スポーツウェアの下に肌身離さず持っている。この2年間、手放したことは全くと言っていい程無かった。
「まだまだ奏姉は前にいる！だから、俺も前を向かなきゃな！」
頬を両手で叩いて気合を入れ直す。
「うっし！行くか！」
翔は再び更衣室へと走り出した。

☆

「……来たよ、奏姉」

とある峠にある霊園。翔の目の前には、天羽　奏の墓があった。
「顧問の先生には法事って言ったけど、本当は今度の日曜日なんだよね」
翔は悪戯っぽく舌を出す。
「今日は奏姉の誕生日だろ？死んだ人間の誕生日ってのも変な感じだけど、さ」
翔の目から涙が零れ落ちる。
「毎年、毎年、ちゃんと、祝うって……約束した、からさ……！」
溢れる涙を無視して翔は話を続けた。
「っく……！おめでとう、奏姉！今年で１９歳になるんだよな！」
涙を乱暴に拭い、笑顔で語りかける。
「……また、来るよ。今度はふらわぁのお好み焼きでも持ってさ。あそこ、めっちゃ美味いんだぜ。こないだなんか先輩が……」
そうして翔は数分の間奏の墓前で喋り続けた。その声が、奏に届くと信じて。
「……じゃあ、また」
そう言って翔は花束を置いて霊園を去る。先程までの泣き顔からは想像もつかない程スッキリとした笑顔で奏に別れを告げた。

☆

「……あら？先客が居たのね」
それから暫くして、一人の少女が奏の墓前にやってきた。
名は風鳴　翼。ツヴァイウイングのメンバーで、奏の親友だった少女だ。
翼は奏の墓前に供えられた真新しい花束を見て、少し意外そうな顔をする。
「死者の誕生日を祝うなんて、不謹慎なことと分かっているわ。でも、おめでとうと言わせてくれるかしら？」
翼はそう言って奏の墓石を見据えた。
「……誰だか分からないけど、きっと同じことを考えてる人がいたの

ね。こんな、虚しいことを……」
それだけ言って、翼は霊園を後にした。

☆

「あ、そうだ！忘れるとこだったぜ！」
人通りの少ない並木道。
翔は途中で立ち止まり、財布を探る。出てきたのは、一枚の広告。
「ツヴァイウイングのニューアルバムの予約、確か今日からだったよな？早期購入特典もあるし、ちゃちゃっと予約してくっか！」
くるりと振り返り、ＣＤショップへと進路を変更した。
「きゃっ！」
しかし振り返った瞬間、翔は誰かとぶつかってしまった。
「いたた……。悪い、大丈夫……か!?」
翔はぶつかった方を見て固まる。
「いえ！私の方こそ、よく見てなかったです。ごめんなさい……？どうかしたんですか？」
翔にぶつかったのは、同い年くらいの少女だった。少女は後頭部を掻きながら申し訳なさそうに謝罪する。が、翔が固まっているのを見て不思議そうに首を傾げた。
「む、紫……」
翔の目は少女の脚の付け根。ぶっちゃけパンツに釘付けになっていた。
「え？きゃあ！ちょっと！そんなに見ないで下さい！」
少女は悲鳴を上げてスカートで隠す。
「あ、ええと。すんませありがとうございました！」
「どっち!?」
そんな漫才を一通り終え、二人とも落ち着いた。
「いや本当に悪かったよ。俺は天城　翔。君の名前は？」
「私は立花　響っていいます」
「！君が……」

翔は彼女のことを知っていた。テレビや新聞でも一時期取り上げられていたツヴァイウイングのライブ中に発生したノイズ襲撃事件の【生還者】である。
彼女自身、取材で『奏に助けてもらった』と明言しており、翔の心中には複雑な感情が渦巻きだしていた。
「あ、私のこと知ってるんですね……。そりゃそっか。私、一杯テレビに出てたことありますもんね……」
翔の様子に気づいた響が、何かを察したように俯いた。
（……俺は、この子を恨んでるのか？）
「……それでも」
（この子が奏姉を殺したって、そんな歪んだ感情が確かにある……。多分、簡単には消えてくれないだろう。でも）
「それでも、前を向け」
翔が響に聞こえないような声で呟いた。
「立花さんだっけ？」
「は、はい！なんですか!?」
響は突然名前を呼ばれてビシッと直立する。
「……俺、天羽　奏の従弟なんだ」
「！あ、わ、私……」
響はショックを受けたように立ち竦み、言葉を失った。
「何も言わなくていいよ。君がこの2年間、どんな目に遭って、どんな風に過ごしてきたかは大体想像がつくから。でも、これだけは言わせてくれ」
翔は言葉を紡ぎながら、様々な感情を巡らせる。
怒り、恨み、嫉妬、憎悪……。決して、簡単には割り切れるものでなかった。
「俺は君を恨んでいる」
「！」
響の眉根が垂れ下がる。今にも泣き出しそうだ。
「それでも、この気持ちを君にぶつける必要は無いと思う。それは、俺が前を向くのに邪魔だから」

翔はやや自己完結気味に話を終える。
「？えっと、私、何て言ったらいいか分かんなくて……」
響は恨んでいるやら感情をぶつける必要は無いやら言われ、脳が理解に追いつかなかった。
頭の中にずっとあったのは。
「ごめんなさい！私のせいで、奏さんが……！」
謝罪と贖罪。ただそれだけだった。
「謝るなよ」
「本当に、ごめんなさい……」
「謝るな！」
響の真摯な態度に、翔は自分がちっぽけに見えて、思わず大声を上げた。響は再びビクッと体を強張らせる。
「謝って許すことじゃないし、償ってもらおうなんて考えてない！君は奏姉が命を懸けて守った命なんだぞ！もっと胸を張って生きろよ！もう、君だけの命じゃないんだぞ！」
「！う……、うぇ……」
翔の言葉を聞き、響は遂に涙を流し始めた。
「あ、いや……ゴメン！泣かすつもりは無かったんだ」
響の涙を見た翔は、サーっと頭から血が引いていくのを感じ、冷静になった。
「ち、違うんです……！私、友達とか家族にしか、『生きて』って言われたことなくて……！まさか奏さんの家族の人に『生きて』って言われるなんて思わなくて……！悲しいけど、嬉しくて」
響が涙ながらに涙の訳を話す。
「そ、そっか……。まあ、今更どうこう言うつもりは無いよ。ただ、奏姉の分まで頑張って生きてくれれば、それでいい」
（これが前を向くってことなのかな？なあ、奏姉？）
すすり泣く響を優しく抱き、空を見上げた。奏が微笑んだような気がして、翔も思わず微笑んだ。
バシュッ　バシュッ　バシュッ
晴天の霹靂のような、一瞬の出来事。

響と翔の周りを、ゼリー状の半透明な生物が大量に取り囲んだ。
「ノイズ……!?」
響が恐怖の表情を浮かべる。
「話では聞いてたけど、流石に突発的過ぎるだろ！逃げないと……」
奏の分まで強く生きてくれと願った響が危ない。翔の頭は高速回転で作戦を考えていた。
「よし！立花さん！駆け抜けよう！」
「駄目です！ノイズに触れるとあっという間に……うう……！」
響は口にするのも恐ろしいとばかりに黙り込んだ。
「確かノイズは攻撃する瞬間だけ実体化するんだろ？だったら今は触れられない筈だ！それしか道はない！」
「か、翔さん……！でも……！」
バシュッ
翔達に一番近かったノイズが一斉に襲いかかる。
「くっ！」
「わわっ！」
（間に合わない！奏姉、ごめん……）
目を閉じ、響を庇う様に抱き締めた。
パキィィィィン
「……？」
目を開く。目前に迫ったノイズ達が、燃え上がるように消え去った。
「こ、これは……？」
よく見ると、翔の周りに瑪瑙色の皮膜のようなものが張り巡らされていた。
「この色……まさか!?」
ペンダントを取り出すと、瑪瑙色の石が光っていた。バリアの様なものは、石から出ているようだ。
「ありがとう、奏姉。おかげで、まだ前を向けそうだ！」
ペンダントを、ぐっと握り締める。
力強い存在を、翔は確かに感じた。

第2章　捕まっても、前を向く

「こ、これは……!?」
　ペンダントと同じ色の皮膜に触れる。陶器のような、プラスチックのような、なんとも言えない硬い質感が手に伝わった。
「……よし！立花さん！一緒に逃げよう！このバリアみたいなのがあれば、ノイズも襲ってこれないらしいし」
　翔は響の手を握る。
「は、はい！」
　響は突然繋がれた手に驚きながら頷く。
　二人はノイズの群れの中を走った。バリアに触れたノイズ達は先程のように黒く炭となって燃え上がった。
「よし！このまま」
「きゃあああああ！」
　悲鳴が聞こえ、翔がそちらを向くと、女の子が一人ノイズに襲われていた。
「人がいたのか！」
「助けましょう、翔さん！」
　響が翔にそう言うと、翔はゆっくりと頷いた。
「ただし、助けるのは俺だけだ。響ちゃんは逃げてくれ」
「で、でも……」
「このよく分からない力がどこまで続くのか分からない！響ちゃんは……助けを呼んできてくれ！」
　翔は響を逃がすことを最優先した。奏の残した命を、自分が絶つ訳にはいかないと思った。
「嫌です！私もあの子を助けたいんです！一緒に行かせて下さい！」
「駄目だ！君を危険に晒す訳には」
「奏さんなら！」
「！」
　響は翔の言葉を遮り、叫んだ。

「奏さんなら……絶対、翔さんも、あの子も見放したりしません！だから、私も手伝います！それに……」
響は目を閉じて、決心したように再び目を見開いた。
「私は生きるのを諦めません！絶対に！それが奏さんとの約束なんです！」
そんな響の目に、翔は奏を感じた。
護るという、強い意志。

☆

数年前。まだ翔が小学生の頃。奏と翔の親は母方が姉妹で仲が良く、お隣さんというのもあってお互いの家によく遊びに行っていた。
そんなある日、翔は近所の中学生達に喧嘩を売っていた。三人組でたむろしている中学生の内、リーダー格らしき男が翔に近づく。
「おらおら弱えなあ！そんな弱さで俺たちに喧嘩売ろうってのか？」
「うるさい！お前らは奏姉を馬鹿にした！絶対に許さないぞ！」
何度も殴られたらしく、翔の顔は数箇所腫れ、身体中擦り傷と土で汚れていた。
「ハン！男女に男女って言って何が悪いんだよ!?第一、テメェが許さねえからって俺たちには関係ねえんだよ！」
中学生の蹴りが翔の腹に突き刺さる。
「ぐぶっ！げほっげほっ！」
翔は腹を押さえて蹲る。
「ほーらやっぱ弱えじゃねえか！お前みたいな弱い弟を持って、天羽も苦労してんだろうな！」
「ッ！」
その一言が、翔の怒りに火を注いだ。
「うおおおおッ！」
翔はリーダーらしき中学生に掴みかかった。
「奏姉に迷惑なんかかけるか！俺はお前らを一人残らず……」
「ッゼェんだよ！」

リーダーは翔を無理矢理振りほどき、地面に投げ捨てた。
「ッ……！」
「ムカつくぜテメェ！弱いくせに喧嘩なんか吹っ掛けやがってよ！このまま……」
「お前ら！何やってんだ！」
その時、奏が駆けつけた。奏は倒れている翔の元に走り寄る。
「大丈夫か翔!?こいつらに何されたんだ!?」
「アイツら……！奏姉を『男女』って馬鹿にしたんだ。だから、俺、許せなくて……」
「翔、お前そんなことで……ッ！」
奏は翔を強く抱きしめた。翔の頬に、奏の涙が垂れ落ちる。その温かさに頬が緩んだ。
「奏姉……泣かないでよ。俺が、アイツらぶっ飛ばして謝らせるか……ら……」
「もう１０分も殴られっぱなしのくせによく言うぜ！弱いくせに出しゃばるから……」
「黙れッ!!それ以上何も喋るなッ！」
奏が鬼の形相で中学生グループを睨む。取り巻きの２人は奏の迫力に恐れをなして逃げ出した。
「おい！待てよテメェら！」
「お前は許さない……ッ！」
奏が残ったリーダーの肩を掴む。
「うるせぇ！お前もボコボコに」
ドカッ　バキッ　ドゴッ
「つ、強い……」
リーダーは奏の殴打をモロに食らって倒れた。
「奏姉……」
翔は奏の目を見た。怒りと、優しさと、勇気。そんな強い意志が込もった目。翔を護るという、強い目だった。
翔はその後すぐに気を失った。次に目を覚ましたのは、奏の部屋のベッドの上だった。

「う……ん……？」
「翔！大丈夫か!?痛いところはないか!?」
奏が濡らしたタオルで翔の顔を冷やす。
「身体中、痛いよ。でも、一番痛かったのは……ここなんだ」
そう言って翔は自分の胸を掴んだ。
「奏姉が馬鹿にされた時、自分が馬鹿にされるよりも腹が立って、ここんとこがキュッて痛くなってさ。気がついたらアイツらに掴みかかってたんだ」
「翔……！ありがとう！アタシなんかの為に怒ってくれて！アイツらに立ち向かうの、怖かったろ？」
奏は再び涙を流した。それがあの時と同じ温かい涙だと、翔には分かった。
「うん。怖かった。でも、それ以上に許せなかったから……。奏姉、俺頑張るよ！勉強も運動も一杯して、奏姉を困らせないような男になる！」
翔はそう言って、右手の小指を差し出す。
「約束だ。絶対に守る」
「……うん！」
そう言って小指を絡ませる奏の笑顔は翔にとってとても美しく見えた。

☆

「……ちゃんと受け継がれてる」
翔は呟く。心の底から、熱い何かが溢れてくるのを感じた。
「よし！俺があの子の所に行って君に投げる！だからしっかりキャッチしてくれ！」
「ええ!?それは……流石に無茶なんじゃ」
「やればできるさ！行くぜ！」
翔は再びノイズの群れに向かって走り出した。
「うおおおお！」

走る、走る、走る。
一秒でも、一瞬でも、速く。あの子を助ける。それだけを考えて。
「間に合った！」
女の子をキャッチし、すぐさまUターンする。女の子は必死に翔にしがみつく。
「翔さん！急いで！」
響の呼ぶ声が聞こえ、翔は更にスピードを上げた。
「よし！このまま……」
ブゥゥゥ……ン
「！バリアが……」
瑪瑙色の皮膜が薄まる。じきに消えてしまいそうだ。
（やっぱりか……。何となくそんな気はしてた……）
翔は『こうなる』ことを直感的に予見していた。絶望を。ゲームオーバーを。
（けど、終わらせねえ……！俺は、前を向かなきゃいけないんだ！）
「立花！」
翔は響に向かって女の子を投げた。翔の予想通り、女の子はバリアを透過して響の元に向かう。
「え!?わ！えっと……えい！」
響は女の子を何とかキャッチした。
「良かった……」
後は翔がノイズの群れから逃げ切れば終わる。が、翔を護るバリアは、もはやほとんど残っていない。バリアに触れるノイズも、障害物にぶつかる程度のダメージしかない。
「悪い。奏姉」
翔は立ち止まり、空を見上げた。バリア云々よりも、足が動かないのだ。人ならぬ速力でのシャトルラン。翔の足は、とっくに悲鳴を上げていた。先程限界を迎えたらしく、翔はその場に尻餅を突いた。
「翔さん！」
「俺、もう駄目みたいだ……精一杯やったけどよ」
パキィィン

瑪瑙色のバリアが完全に消える。翔は諦観の笑いを浮かべ、目を閉じた。
（俺、最後の最後まで、前を向けたよ。ちょっと無茶したけど、大丈夫。奏姉の意志は、ちゃんとあの娘に……）
Ｂａｌｗｉｓｙａｌｌ　Ｎｅｓｃｅｌｌ　ｇｕｎｇｎｉｒ　ｔｒｏｎ……
翔が聞いたのは、歌だった。
優しさと強さに満ち溢れた、温かい歌。

☆

「翔さん！」
響は悲鳴を上げた。
彼が、翔が、立ち止まってしまったのだ。
（嫌だ……！あの人を、私に『生きて』と言ってくれた人を……）
響の瞳が涙に揺れる。
「失いたくない！」
ドクン
「護りたいんだ！」
ドクン
Ｂａｌｗｉｓｙａｌｌ　Ｎｅｓｃｅｌｌ　ｇｕｎｇｎｉｒ　ｔｒｏｎ……
響は、胸に浮かんだ歌を無意識に口ずさんだ。

☆

特異災害対策機動部二課・本部
「司令！ノイズの発生地点に高エネルギー反応！」
藤堯がモニターに響達の様子を映し出す。
（！奏……!?）
翼はモニターに映る翔に、奏の姿を一瞬見つけた。

（違う……。奏は、もう……）
翼は首を横に振る。
「これは……アウフバッヘン波形!?」
了子がエネルギーの波長を見て思わず声を上げる。
「波形の照合終わりました！解析結果、出ます！」
藤堯がそう言うと、モニターに解析結果が表示された。
［ＧＵＮＧＮＩＲ］
「ガングニールだとぉ!?」
司令の風鳴　源十郎が驚きの声を上げる。
（そんな……!?それは、奏の……!?）
翼は理解するのに時間がかかった。
奏によく似た少年と、再び現れた奏の力。
（一体何が起こっているというの……？）

☆

光の柱。翔の目にはそう映った。
「なんだ……!?何が起きてるんだ？」
「ウゥゥヴァァァァーーーーッ！」
響の体から『何か』が飛び出した。
鎧。武器。力。勇気。歌。
「スゲェ……」
翔は自身の置かれた状況を完全に忘れ去り、響に見入っていた。
「ハァァァァッ！」
光が収まると、響の姿が変わっていた。
最も顕著なのは服装だ。レオタードのような、水着のようなアンダーシャツに、装甲やスカートが付いた服。
「そ、その格好は……？」
「わ、私……？」
響自身も変身に戸惑っていた。
ノイズの一匹が響に襲いかかる。

「！危ねぇ！」
「きゃあ！」
　響は咄嗟に腕でガードした。すると、響に触れたノイズが燃え上がるように消え去る。
「これは……俺のバリアみたいなのと同じ……？」
「歌を感じる……！この歌は……？」
　響の言葉に耳を澄ませると、確かに音が聞こえる。
「絶対に……離さないッ！この繋いだ手は」
　響は湧き上がる歌を歌う。何故だか力が湧いてくるのを感じた。
「こんなにほら、あったかいんだ　人の作る温もりは」
　響は歌ったまま、女の子を抱えて翔の元へ走る。
（できる……！今なら翔さんも、この子も、助けられる！）
「難しい言葉なんて要らないよ　今、分かる　共鳴する　Ｂｒａｖｅ　ｍｉｎｄ！」
「うおっ！」
　翔は響に抱えられて驚きの声を上げる。
　響はそのまま二人を抱えてノイズから離れていった。
（スゲェ……。少なくとも、女の子の腕力じゃない。この服と、歌の影響なのか……？）
　翔は響の服をツンツンとつつく。
「わひゃ!?翔さん変なとこ触らないで下さい！」
「わ、悪い！って、前、前！」
　勢いよく跳んだ響の目の前には、木の幹が。
「わ、わ！」
　響は咄嗟に木を蹴る。その衝撃で木が悲鳴を上げてへし折れた。
（に、人間業じゃねえな……）
　翔はもう余計なことはしないでおこうと誓った。
「紡ぎ合いたい魂　１００万の気持ち　さあ！　ぶっ飛べこのエナジーよ！」
　ポウ……．
　翔は、響の周りに小さな光の球が集まっていくのが見えた。

「開放全開！　いっちゃえＨＥＡＲＴの全部で　進むこと以外……うわあ！」
　響の歌が途絶える。ノイズの追撃で、体勢が大幅に崩れてしまったためだ。脇に抱えられていた二人はそのままのスピードで放り出される。
「のわ！危ねぇ！」
　翔は放り出された状態で女の子をキャッチし、背中で着地した。背中に摩擦熱が集中し、痛みと化す。
「……ッ！」
　翔は痛みに顔を歪めながらも、女の子をしっかりと離さない。
（この程度……奏姉の痛みに比べれば！）
「立花さん！大丈夫か!?」
「っく……！」
　響はノイズの攻撃に防戦一方だった。
　その防御すらまともに行えていない。
「クソッ！もう一回あのバリアみたいなのが出せれば……！」
　翔はペンダントを見るが、ペンダントは沈黙を通していた。
「こんなものに頼ってちゃ駄目だ！とりあえず、この子を安全なところに……」
　Ｉｍｙｕｔｅｕｓ　ａｍｅｎｏｈａｂａｋｉｒｉ　ｔｒｏｎ……
　響の歌が遮られるのとほぼ同時に、歌声が聞こえた。
　鋭く、強く、凛とした歌だ。
「また、歌……？」
　翔はその歌声に聞き覚えがあった。
　美しく、気高く、それでいてどこか無機質な歌声。
「……風鳴　翼!?」
　翔が見たのは、響と同じような格好でノイズに立ち向かう翼の後ろ姿だった。
「何で……？それに、あの格好……」
　翔の頭の中で、ある結論が導き出されようとしていた。
　奏の死は、ライブ中に発生したノイズに襲われたものだと政府の特

務機関とやらから伝えられた。
　ノイズの襲撃は、所謂地震やハリケーンといった突発的に発生する自然災害と同類だと教えられていた翔は、ノイズを恨むに恨み切れず、仕方がないものだと割り切っていた。
（もし、ツヴァイウイングというユニットが仮の姿だったら……？ノイズと闘う組織が、風鳴　翼と同じように、奏姉に闘わせていたのだとしたら……？）
　翔の中で眠っていた感情が湧き上がる。
（許さねえ……ッ!!）
「去りなさい！　無想に猛る炎　神楽の風に滅し散華せよ」
　翼の歌が聞こえるが、翔の耳には届かない。
（もしそんな組織があるのなら、そいつらが奏姉を殺したようなもんじゃないか……！）
　翔は翼の後ろ姿を睨むように見つめながら怒りの感情を必死に抑え込む。目を閉じて深呼吸を一つし、熱された思考を冷やす。
（落ち着け……。前を向くんだ。あの人がノイズを片付けてる内に、この子を……）
「立花さん！一緒に逃げよう！」
「でも、翼さんが……」
「あの人が何の為に闘ってるか考えるんだ！俺たちがこの場から離れることが、あの人への一番の人助けだろ!?」
　翔は語気を強めて響を諭す。
「で、でも！……分かりました」
　響は戸惑っていたが、翔の目を見て決心を固めた。
「嗚呼絆に　全てを賭した閃光の剣よ」
［蒼ノ一閃］
　翼の一振りで、蒼い衝撃波がノイズ達を次々に飲み込んだ。
（強い……！奏姉も、きっと、もっと強かった筈だ……！）
　怒りを鎮めても、奏を戦場に駆り出した組織への強い負の感情は消えてはくれない。翔はそんな感情を押し殺し、女の子と響を連れて街道に出る道へと逃げて行った。

☆

ノイズは全滅し、後始末の為に特異災害対策機動部があくせく働いていた。

「……」

翔はそんな光景の中ペンダントを握り締め、奏と機動部の関連性について逡巡していた。

「翔さん」

響が話しかけてきた。先程の変身は解け、元の服装に戻っている。

「……」

しかし響の声は翔には届かなかった。

翔は黙祷のように目を閉じて黙り込んでいる。

「あの……翔さん？」

「……ん？ああ。立花さんか。ゴメン、聞いてなかった」

「大丈夫ですか？ノイズに囲まれた時、尻餅を突いて座り込んでましたけど……？」

「ちょっとふくらはぎが張ってるけど、しっかりアフターケアしてやれば元通りさ」

平然と受け答えをする翔だったが、その視線はいつの間にか翼に釘付けだった。翼は一人の男性に活動報告のようなものをしているらしく、真剣な表情で会話をしていた。

「……翼さん。一体何者なんでしょうか？」

「特異災害対策機動部」

翔は呟くように答える。

翔達が助けた女の子が渡された書類の隅にそう書いてあったのを、翔は見逃さなかった。

「立花さん。確か奏姉に助けられたって言ってたよね？まさか奏姉も、君達みたいに……？」

「はい。私や翼さんみたいに変身して、ノイズと闘っていました」

「そうか……やっぱりか」

翔は再び湧き上がる怒りに、必死で耐える。
（恨んだって、奏姉は帰って来ない！復讐なんて、前を向くとは真逆の行為だ……！）
「お楽しみ中失礼～」
翔の深刻な雰囲気とは真逆の間延びした声がした。見ると、眼鏡をかけた研究者らしき女性がこちらに歩み寄ってきていた。
「私、櫻井　了子。デキる女と評判の、特機部ＩＩの研究部門の顔よ」
「は、はあ……」
了子は声高に自己紹介をする。翔と響は温度差についていけずぽかんとする。
「突起物……？」
「特異災害対策機動部二課の略称なんです。と言っても、蔑称ですがね」
スーツ姿の男性がそう言いながら了子の前に出る。
「了子さん。ここは僕が」
「あらそう。残念」
了子は少し残念そうに眉を下げた。
「僕は緒川　慎次。二課の諜報活動を担当しています」
緒川と名乗る男は柔和な笑顔でそう言った。
「……それで？俺達に口止めでもしに来たんですか？」
翔は感情を出さないように素っ気なく尋ねた。
「まあ、似たようなものですよ。天城　翔君」
「！」
翔は赤の他人に自分のフルネームを呼ばれ、警戒の念を強める。
「……いい気はしないな。こっちは全然そっちのことを知らないのに、そっちは俺のことをよく知ってる。気味が悪いったらない」
「すみません。仕事上、事前調査は欠かせないものですので……」
緒川が申し訳なさそうに頭を下げる。翔はそんな緒川の態度を見て、こちらが申し訳なくなってくる。
「……そう言うと思って、少し意地悪してみました」
そう言って、翔は微笑んだ。

「おや、一本取られてしまいましたね。お二人とも、あったかいもの、どうぞ」
緒川はそういって紙カップに入ったホットコーヒーを差し出した。
「「あったかいもの、どうも」」
二人は紙カップを受け取り、中身を啜った。
「それで？俺達も書類か何かにサインすればいいんですか？」
「いえ。すみませんが、お二人にはもう少しお付き合い願います」
緒川がそう言うと、翔達の周りを黒服の男達が囲った。
「「！」」
「一般人の方には機密保持の契約と承諾書にサインしてもらうだけで済ませるんですが……」
ガチャン　ガチャン
緒川が一瞬の隙をついて二人の手首に電子ロック式の手錠をかけた。
「貴方達は少し事情が異なりますのでね」
「な」
「なな」
「「なんで～!?」」
翔と響の、人生初手錠であった。

第3章　学校でも、前を向く

「あの、翔さん。私達どうなっちゃうんでしょうか？」
「……死刑？」
「ぴぎぃ!?」
　連行される車の中、翔と響は漫才を繰り広げていた。
「安心して下さい。お二人に危害を加えるつもりはありませんよ」
　緒川が苦笑しながら答える。
「わ、私こんな若さで死ぬなんて嫌です～！まだまだ食べたいものとか一杯あったのにー！未来と買い物行く約束とか、未来と美味しいもの食べる約束とか、未来と一緒に遊ぶ約束とかー！」
「安心しろ立花さん！君は俺が必ず護るから！」
「ありがとうございます！だったら翔さんは私が護ります！」
「聞いてませんね……」
　翼が呆れたようにため息を吐く。
「あ、あはははは……」
　緒川は、今日何度目かの苦笑をした。

☆

「なんで、学園に……？」
「ここが私立リディアン音楽院か」
　車に揺られること数分。翔達は私立リディアン音楽院へ到着した。
（奏姉の母校……か）
「こちらへ」
　緒川に案内されるがままリディアンに入る。翔達はエレベーターに乗せられ、地下に移動した。
「スゲー！秘密基地みたいだ！」
　翔はガラス張りのエレベーターから地下の様子を見た。
「翔さん、子どもみたい……」
　響はそう言ってくすくすと笑う。

「お、男は誰だって秘密基地とかに憧れるもんなんだよ！ね？緒川さん？」
「いやあ、僕はあんまり……」
「う、裏切り者～」
「お喋りはそのくらいにしなさい」
翼がぴしゃりとその場の空気を締め直した。
「これから行く先に、笑顔や雑談は必要ないわ……」
それだけ言って、翼は翔の顔を見た。
（奏にそっくり……。緒川さんの話では従弟だそうだけど……）
翔も翼の顔を見た。
（この人が奏姉のパートナーか。さっき見た実力といい、奏姉の足を引っ張るような真似はしないはずだ。一体あの時何が……）
見つめ合う二人を、響と緒川は交互に見て、顔を見合わせて困ったように笑った。

☆

「ようこそ！特異災害対策機動部二課へ！」
翔達が部屋に入ると、クラッカーの爆ぜる音と共に、大柄な男性が二人を歓迎した。
「俺は司令の風鳴　弦十郎だ！よろしくな！」
（！風鳴……？）
「司令は翼さんの叔父なんですよ」
翼を見る翔の心中を察して、緒川が説明を加える。
「なるほど。よろしくお願いします」
「……はあ」
翼が和気藹々と翔達に接する二課のメンバーを見て、ため息を一つ。
（なるほど。いつもこんな感じの雰囲気に振り回されてるのか）
翔は少しだけ翼に同情した。
「さ、歓迎パーティを始めましょ」

あの後別れて先行していた了子がドリンクを配り始める。
「あ。じゃあこの手錠外して下さい。手錠したままのパーティなんて、きっと悲しい思い出として残ります」
響が手錠を差し出しながら言う。緒川の持っていた鍵で手錠が外された。
「あの、俺は……？」
しかし、何故か翔の手錠は解錠されなかった。
「君はもうちょーっとだけ待っててね♪さ、弦十郎君」
「……ああ」
弦十郎は了子に促され、翔の前に立つ。
「君には、伝えなければならないことがある……」
弦十郎は深刻な面持ちで翔に向き合う。翔には、弦十郎の言わんとすることが全て分かっていた。
「……奏姉の死の真相、ですか？」
「！ああ。奏君は、そこの翼や響君のように、シンフォギアを纏ってノイズと闘っていた」
「シンフォギア……」
翔は弦十郎の言葉を反芻する。
「そして、二年前のあの日。ライブ会場をノイズが襲った。応戦していた奏君は、絶唱という負担の大きい技を使って……」
「もう、いいです……」
（こいつらのせいで奏姉は……やめろ！考えるな！奏姉が死んだのは、別にこの人達のせいじゃないだろ！でも、なんでこの人は……そんなに悲しい顔をしてるんだよ？なんでそんな、辛い顔で下を向いてるんだよ!?向くなら……）
「奏君は、本来ガングニールの適合者ではなかった。だから、我々が投薬を施して」
「もういいです！」
「！」
翔は叫んだ。その場にいた全員が驚いて黙り込む。
「立花さんと翼さんの変身を見て、なんとなく分かりました。奏姉が

人々を護る為にノイズと闘ってたって。全部、予想通りでした」
「あ、ああ。それで」
「謝る、なんて言わないで下さいよ」
「！」
　弦十郎は翔の顔を見て驚いた。
「大丈夫です。俺は、大丈夫ですから……」
（向くなら、前を向いてくれ。奏姉だって、きっとそれを望んでる！）
　翔は、笑っていた。涙を流しながら。
　それは、誰がどう見ても自然な笑顔ではなかった。
　恨み、怒り、復讐心。それら全てを、前を向く為に抑え込んだ。それでも抑えきれずに涙となって流れ出た。そんな表情だった。
「……俺達が浅はかだった。君は、とんでもない覚悟をして今まで生きていたんだな……。そんな君に許してもらおうなどとは、卑怯な大人のすることだ」
　弦十郎はそれ以上何も言わなかった。翔の表情を見て、彼の心中を垣間見たから。その壮絶な感情の奔流を、ほんの少しだけ知ったから。
「……雰囲気崩しちゃってすみません。さあ、パーティの続きを」
　ズキン
「……ッ!?」
　その時、翔を激しい頭痛が襲った。翔は堪らずその場に蹲る。
「翔さん!?どうしたんですか!?」
「クソ……また『フォン』の奴か！」
「担架を！急いで！」
　周りが一気に騒がしくなるが、翔はそれどころではなかった。
（何カッコつけてんだよ？目の前に奏姉の仇がいるんだぜ？一発くらい殴ってもいいじゃねえか）
　頭の中に、声が響く。
「……違う！復讐なんかしてちゃ、前は向けない！」
（前を向く、ねえ。今のお前にそんなことができるのか？復讐一つできねえ臆病者がよ？）

「うるさい……！黙れ！」
（怒りを開放しろ。奏姉を奪った全ての者にぶつけろ。そうすりゃ……）
「黙れぇぇぇぇ！」
翔は手錠に思い切り頭を打ちつけた。額の皮膚が裂け、鮮血が滲み出る。
「はぁ……はぁ……」
頭痛と、声が治まる。
「翔さん!?大丈夫ですか!?」
響が翔に駆け寄り、肩を支えて起こす。
「ああ……平気、だよ」
「平気でもへっちゃらでもなさそうですよ！ほら、血が……」
響はハンカチを取り出し、翔の額に当てる。
「悪い……。立花……さ……」
翔は気絶した。響の腕にぐったりと重みがのしかかる。
「翔さん!?翔さん!?しっかりして下さい！翔さん！」
響の呼び声も虚しく、翔はしばらく目を覚まさなかった。

☆

「……」
よお。こっちに来るのは久しぶりだな。
「……フォン。何のつもりだ？」
まあ怒るなよ翔。奏姉の仇を目の前にして、ちょっと怒りが抑えきれなかっただけだ。あの源十郎とかいうオッさんにも、腰抜けのお前にもな。
「……腰抜けだと!?いつまでもガキみたいに感情剥き出しで暴れるお前なんかに俺の何が分かる!?前を向こうと、奏姉の約束を守ろうとする俺の何が分かるってんだ!?」
お前のことは全部分かるよ。前にも言ったろうが。お前は俺で、俺はお前だ。

「……」
まだ怒りは忘れてないみたいだな。初めはジジイみたいに枯れちまったかと思ったが……。それだけ知れれば充分だ。じゃあな。
「待て！次勝手に出てきたら許さないからな！」
はいはい。ヤバくなったら勝手に代わるよ。手の焼ける宿主だぜ……。

☆

「……どう見る？了子君？」
翔が搬送された後の指令室で、弦十郎は了子に尋ねた。他の職員はパーティの片付けをし、響は席を外した翼を探しに指令室を出て行った。
「なんとも言えないわね。能力を発動した反動か、はたまた『仮面』の仕業か。どちらにせよ、警戒する程脅威にはならなさそうだけど」
了子は真剣な眼差しで考えながら言った。
「仮面？」
弦十郎が聞き返す。
「僅か15歳の男の子が、誰よりも慕っていた者の死をたった2年で乗り越えられるとは考えにくいわよ。何らかの仮面を自分に被せることで、外との関わりを保っているように見えたわ。実際、かなり無理してるように見えたけど？」
「……ああ。確かにな。仮面、か。また上手く喩えたモンだな。そいつを外してやるのも、俺達大人の仕事ってこった」
弦十郎は先刻の翔の涙を思い出し、顔に険を増した。
ビーッ　ビーッ　ビーッ　ビーッ
その時、緊急事態を知らせるブザーが鳴り響いた。

☆

「……ここは？」

二課の医務室。翔は目を覚まし、上体を起こして辺りを見た。ベッドの周りにカーテンがかかっている。
「目が覚めたみたいね」
カーテンを開いて、了子が入ってきた。
「了子さん……。すいません。折角のパーティを台無しに……」
「いいわよ別に。どの道それどころじゃなくなったんだし」
了子はそう言って簡易ディスプレイからモニターを映し出した。モニターには街を襲うノイズと、そこに急行する翼と響の姿が映っていた。
「ノイズ……！それに立花さんと、翼さん！」
翔はモニターに顔を近づける。
「はいはい。患者は安静にしてなさいね」
了子はそう言ってとん、と翔を押してベッドに寝かせた。
「俺はもう大丈夫です！それより、仕事は大丈夫なんですか!?」
「研究部門の人間はあんまりやること無くてね。モニタリングして緊急時に備えるくらいしか」
「じゃあ、それを全力でやって下さい！俺なんかに構わないで！」
翔は強く言い放った。
「……第7地区」
了子が真剣な表情でそう呟いた。
「ノイズが発生してる地点よ。ここからそう遠くないわ。それじゃあ私は指令室に向かわせてもらおうかしら。じゃあね♪」
了子はそれだけ言うと医務室を出て行った。
「……了子さん。俺のやりたいことが分かってるみたいだな……」
翔はベッドから降り、靴を履いた。
「翼さんはともかく、立花さんは危険だ！俺でも、役に立てるかも知れない！」
ペンダントを握り締め、医務室を出た。

☆

「たっだいま～」
指令室に戻った了子は、所定の席に座ってモニタリングを再開した。
「了子君！彼の様子は!?」
弦十郎は了子の帰還に驚き、翔の容態を尋ねた。
「心配ないわ。軽い脳震盪と疲労だったみたい。今は安静にしてるわ。自分より仕事を優先しろって怒られちゃった」
「そうか……。それで、アレについては……？」
弦十郎はモニターから目を離さずに言った。
「回収は無理ね。気を失っている間ずっと握り締めてたもの。けど、ほぼ睨んだ通りだと思っていいわ」
「やはり……八尺瓊勾玉か」
弦十郎の顔が険しくなる。
「翼さん、間もなくノイズと接触します！」

☆

「去りなさい　無想に猛る炎　神楽の風に滅し散華せよ」
第7地区。翼はギアを纏い、歌いながらノイズ達を殲滅していた。
［逆羅刹］
両足に装着したブレードを、カポエイラの要領で倒立し、振り回しながら敵を斬り刻んでいく。
「たあっ！」
響が合流し、蹴り下ろしでノイズを一匹倒す。
「何ッ!?」
翼は響の乱入に驚き、一瞬動きが止まる。
「翼さん！私も一緒に闘います！」
「……」
翼は無言で返し、ノイズに集中し直す。
（奏の力は……そんな程度のものではないのよ！）
翼は湧き上がる怒りを力と換え、剣を握った。

☆

「翼さん！」
ノイズを撃退し、とりあえずの危機は去った。響は翼に駆け寄り、労うかのように翼の名を呼んだ。
「私、頑張ります！今はまだ無理でも、必ず強くなって、翼さんの役に立ってみせます！だから、一緒に闘いましょう！」
響の屈託のない笑顔が、翼には辛かった。
自分の弱さを覗かれているようで。ちっぽけな嫉妬心に囚われている自分が、もっとちっぽけに見えて。
「……そうね。私と貴女、一緒に闘いましょう」
だから、翼は刃を向けた。響に、弱い自分を重ねて。
「……え？」
響はぽかんと口を開けた。
「いえ、私が言ってるのはそういう意味じゃ……」
「分かっているわ。私が貴女と闘ってみたいの」
「私は嫌です！翼さんと闘うなんて」
「そんな覚悟では、どうせこの先闘えないわ！覚悟を決めなさい！」

☆

「困ったモンだ……」
指令室。弦十郎はため息を吐くと、指令室を出ようとする。
「司令！どちらへ？」
「誰かがあの馬鹿者を止めねばならんだろう？ちょっと行って」
「その必要は無いみたいね」
了子の言葉に弦十郎がモニターを見ると、そこには現場に走る翔の姿があった。
「な!?了子君、まさか……」
「青春ね～♪若さっていいわあ」

了子の呑気な一言に、弦十郎はまたため息を吐いた。

☆

［天ノ逆鱗］

翼が空中高く放り投げた剣が巨大化し、翼の足と連結して響の頭上に降ってくる。翼の両脚に付いたスラスターが更にスピードを加える。

「立花さん！」

駆けつけた翔が響の前に出て、響を庇うように両手を広げた。

「翔さん!?どうしてここに!?」

「多分……君と同じ理由だよ」

翔はそう言って微笑むと、目の前の巨大な剣と向かい合う。

「約束したんだ……前を向くって。復讐とか、恨みとか、そういうのに囚われちゃ駄目なんだ！そんなんじゃ、俺よりもずっと前にいる、奏姉の背中なんか見えやしないんだ！」

翔は翼を見る。翔の乱入に驚いているようだが、攻撃の手を止める気はないらしい。

「俺は……絶対に前を向いてみせる！」

ガギィィィン

剣が衝突する瞬間、翔のペンダントが輝き、目の前に瑪瑙色のバリアが現れた。

さっきよりもずっと厚く、硬い結界。

「うおおおお！」

ビシッ　バキィィィン

バリアに亀裂が走る。と同時に、翼の剣が音を立てて砕け散った。

「剣が!?」

「凄い……翔さん……」

「はぁ……はぁ……」

翼が着地し、再び対峙する。

（奏……ッ！）

翼の目には、響を庇うように両手を広げて立ちはだかる翔が奏に見えた。
いつも優しかった奏が自分と真っ向から対立していると想像すると、頭がどうにかなりそうだった。
「まだ、やりますか？翼さん」
翔は肩で息をしながら翼を見つめる。ポツポツと、顔を雨粒が打ち始めた。
「私は……」
翼は顔を伏せる。雨粒は次第に大きくなり、やがて本格的に雨が降り出した。
「そこまでだ！」
弦十郎が駆けつけ、騒動はとりあえず収まった。
「全く……何をしでかすかと思えば」
弦十郎はため息混じりに翼に近づく。
「！翼、お前……泣いて」
「泣いてなんかいません！」
翼は声を荒げる。
「剣に、涙など不要です！私は、戦場でしか生きられぬ存在！感情など必要ありません！」
（……なんだろう？この気持ち？）
翔は翼の言葉に何かを感じ取った。理由や詳細は分からないが、翔の中にある感情がむくむくと膨れ上がっていた。
（なんでか分かんねーけど、今の翼さんを見てるとスゲーイライラする……）
苛立ち。奥歯が無意識に噛み締められ、握る拳に過剰な力が入る。
「翼さん！私、頑張ります！」
重苦しい空気に耐えきれなくなったのか、響がわざと明るく振る舞う。
「もっと強くなって、必ず、奏さんの代わりになってみせます！」
「ッ！」
「やば……」

翔は、翼の怒りが沸点を突破したのを肌で感じ、響に近づいた。
パァン
翔の視界が右に傾き、直後に左の頬から火を噴くような痛みが走った。
「な……!?」
翼は我に返り、叩く相手が違ったことに驚く。
「翔……さん?」
響もまた、突然の出来事に固まっている。
「……する」
「?」
翔の小声が翼の耳に入る。が、何を言っているか分からない。
「イライラする」
「……?何を言って」
「アンタ見てるとイライラするって言ってんだ!」
「「!」」
翔は怒りを露わにした。その場にいた全員が面喰らうように立ち竦んだ。
「何が『涙は不要』だ?何が『感情など必要ありません』だ!?だったら今なんで立花さんを叩こうとした!?」
「……」
翼は視線を逸らす。
「軽々しく奏姉の代わりになるなんて言われて腹が立ったんだろう!?人間に生まれたからには、感情なんか要らなくてもついてくんだよ!邪魔だけど、無くなってくれねーんだよ!」
叫ぶ翔の目には、涙が滲み出していた。
「それでも、それを抱えて、前を向いて生きていかないといけねえんだよ……」
「そんなこと!そんなこと貴方に言われなくても分かっているわ!それでも私は、戦場に立つ剣として」
「もういい!二人ともそこまでにしておけ」
弦十郎が仲裁に入り、口論は終わった。

その日はそこで解散し、響はリディアンの寮長に、翔は母親に大目玉を食らったという。

☆

「……」

風鳴邸。翼は弦十郎に二課の司令として、そして叔父として二度説教を受けた。今は自室で瞑想をしている。

『それでも、それを抱えて、前を向いて生きていかないといけないんだよ……』

翔の言葉が脳裏をよぎり、一瞬眉根を強張らせる。

（剣に感情など不要。例え切っても切れぬ存在であっても、せめて、戦場では……）

翼は瞑想を終え、床に就いた。

☆

翌日。

「うーす」

翔は教室のドアを開け、挨拶をしながら入った。

「おはよー。なんかいつもより元気無いね？」

自分の席に座る翔に、一人の女子生徒が歩み寄ってきた。名は北沢靡（きたざわ　なびき）。翔とは中学からの付き合いだ。靡は翔の顔色を見ると、心配そうに声をかけた。

「そうか？ちょいテンション低いだけだよ」

「そう？ならいいけど。それよりさ！聞いた？昨日ノイズが出たんだって！しかも二回も！」

靡は身振り手振りを交えて話す。

「テンションたけーなお前。ああ、知ってるよ。っつーか襲われたの俺だし」

「えーっ!?大丈夫なの!?怪我とかしてない!?」

靡は翔の周りを飛び回るように翔の体を隈なく調べた。
「安心しろよ。ちゃんと逃げ延びて元気に登校してんだろ」
「良かったー。あ、そうだ！話変わるけど、私また変な夢見たんだ！」
「話変わりすぎだろ……。で？どんな夢なんだ？またミイラが風邪薬貰いに来る夢か？」
靡は時々変な夢を見るらしい。その内容ははっきり覚えていて、翔にちょくちょく話にくるのだ。
「うんとね……翔がヒラヒラのスカート履いてノイズと闘う夢ー」
「！」
（シンフォギア……？まさかな）
翔は一瞬絶句してしまう。靡の夢の内容はいつも現実味も突拍子もない話ばかりなので翔はいつも聞き流しているが、今回は心当たりがありすぎてゾッとした。
「ありえねーって。どこの魔法少女だよ？」
「うーん。魔法少女って言うよりはロボットアニメとかで中の人が来てる奴みたいな感じだったよ？水着とかダイビングスーツみたいなの。それにスカートが付いてて……」
（いやいやいや！まさかだろ……）
「はいはい。下らないこと言ってないで席に戻れって。そろそろＨＲ始まるぞ」
「ちぇ～」
靡は唇を尖らせながら席に戻っていった。
「俺がシンフォギアを……？ないない……ないよな？」
翔の心に一抹の不安が生まれた。

☆

「じゃーね翔！また明日ー！」
放課後。靡がブンブンと手を振って教室を出て行った。
「またな。ったく、犬の尻尾みてぇに手を振りやがって……」
翔も鞄に荷物を仕舞い、教室を出ようとした。

「ああ、天城。ちょうどよかった」
そう言って翔を呼び止めたのは担任の先生だった。
「先生？なんか用ですか？」
「ちょっと来賓室に来てくれ。政府機関の緒川さんという人が、お前に会いたいと言ってな……」
先生が訝しそうにそう言う。
「緒川さんが……？分かりました。すぐに向かいます」
翔は先生にお辞儀をして来賓室に急いだ。

☆

「失礼します」
ノックをして来賓室に入ると、緒川がソファに腰掛けて翔を待っていた。
「どうも。わざわざ呼び立ててしまってすいません」
緒川は相変わらず低姿勢でぺこりと頭を下げる。
「いえ。それで、どういった用件で？」
「ええ。昨日のメディカルチェックの結果が出ましたので、二課本部までご同行願おうかと思って」
「メディカルチェック？そんなんしましたっけ？」
翔は記憶を辿るが、そんなことをされた記憶は全くない。
「了子さん曰く『寝てる間にパパッとやった』そうです」
「ちょっとぉ!?人の体勝手に弄らないで下さいよ！」
翔は思わず体を両腕で覆った。
「すいません……。止められればよかったんですけど」
「……まあいいです。それじゃあ早速行きましょうか」
翔は色々と言いたいことを諦めて、緒川に同行することを決めた。

第４章　異質でも、前を向く

二課指令室。
「司令。翔さんをお連れしました」
緒川に連れられて翔が指令室に入ると、昨日と同じメンバーが集まっていた。
「おう、ご苦労だったな緒川」
「では、僕はこれで」
緒川はそう言うと指令室を出て行った。
「忙しいんですね、緒川さん」
「緒川は翼のマネージャーも務めてるからな。代役を薦めても断るんだ。全く、頑固な奴だよ」
弦十郎は呆れ気味だが、どこか誇らしく言っているように見えた。
「自分の仕事に責任を持てるってことじゃないですか。そういうの憧れます」
翔はそう言って微笑む。昨日とは違う自然体の笑顔を見て、二課の面々の雰囲気が和らいだ。
「さて。それじゃあ早速本題に入りましょ」
了子さんが手を叩いて話題を変える。
「あ、そうだ。了子さん！勝手に人の体弄らないで下さいよ！」
「あはは。ゴメンなさいね～。で、結果なんだけど」
「聞いてないや……」
了子は翔の言葉を聞き流し、モニターにメディカルチェックの結果を映し出す。
「結果は至って良好。ただ……」
「？ただ、なんですか？」
翔は了子が言い淀んだのを訝しんだ。
「心配することは無いわ。ただの特異体質ってだけだから」
「なあんだ。ただの特異体質かあ」
「あはははははは」
「……って特異体質ぅ!?」

翔のノリツッコミが炸裂する。
「そ、そんな……そんなのって」
翔が目を伏せる。
「気持ちは分かるわ。けど安心しなさい。君のは別に危険なものでは……」
「そんなのって、スッゲーカッコいいじゃないですか！」
翔が飛び跳ねて喜ぶ。
「……は？」
了子が予想外のリアクションに呆気にとられる。
「特異体質。くぅ～いい響き！了子さん！どんなのですか!?手から炎が出せるとか？雷を操れるとか？えーっとそれから！えーっとえーっとえーっとえーっと！」
翔は腕をブンブンと振り回して完全に興奮状態になり、手がつけられない。
「落ち着きな……さいッ！」
ドゴォ
凄まじい衝突音と共に、了子が翔の背中に回し蹴りを放った。
「どほぉ!?」
翔は頓狂な声を上げてそのまま吹き飛んだ。
「……無害だけど、単体ではそこまで戦闘向きとは言えないわね。とりあえず聞く気になったかしら？」
「……はい。すみませんでした」
翔は立ち上がり、埃を払って了子の前に座った。
「君の身体はね。フォニックゲインを蓄積する体質があるのよ」
「！フォニックゲイン……」
翔は聞き覚えのある単語を耳にし、話を真剣に聞く姿勢を取る。
「フォニックゲインとは、歌によって発生するエネルギー体のことで、シンフォギアの駆動に必要なものなの」
「なるほど。だから二人とも歌いながら闘ってるんですね」
（奏姉も、きっと……）
「そういうこと。それで、君の身体はそのフォニックゲインを吸収・蓄

積する体質らしいのよ」
「へえ～。んでも、それって凄いことなんですか？別に俺はシンフォギア使えないし、そもそも持ってないですし」
「それに関しては、君の持つ八尺瓊勾玉についての説明も必要ね」
「ヤサカニノマガタマ？俺そんなの持って……まさか、これ？」
　翔はそう言ってペンダントを取り出した。
「そう。世界でも数少ない完全聖遺物の一つ、八尺瓊勾玉。昨日翔君がノイズに襲われた時に起動したの。ゴタゴタしてて説明する時間が無かったけど」
　了子はモニターに八尺瓊勾玉のデータを映し出した。
「完全聖遺物？」
「聖遺物とは人類の祖であるルル・アメルが誕生する遥か前から存在した神々のアイテム。所謂神器って奴ね。聖遺物はそのほとんどが経年劣化などの外的要因によって完全な形で発見されることは稀なの。シンフォギアとは、聖遺物の一部からその力を増幅させる為に私が開発した装置のことよ」
「へえ～……って！シンフォギアって了子さんが作ったんですか⁉」
「あら、私の二つ名を忘れたの？デキル女で評判って言ったでしょ♪」
　了子はそう言うと上機嫌でシンフォギアの解説を始めた。何故シンフォギアでないとノイズと闘えないのか、何故シンフォギアがあの形になったのか等、かれこれ一時間程語った。
「……要するに、聖遺物の起動には相当量のフォニックゲインが必要だから、俺が歌わずに八尺瓊勾玉を起動できたのは体質故と言うわけですね？」
　翔が話を途中で途切らせ、纏めに入る。
「そうなのよ。だから君の存在はとても貴重ってわけ。世界で唯一、単体で完全聖遺物を起動させられる存在の君がね」
「……あの。質問いいですか？」
　翔が神妙な面持ちで了子に尋ねた。
「この八尺瓊勾玉を使いこなせれば、俺もノイズと戦えますか？」
「無理」

「え？」
「無・理♪」
了子がきっぱりと言い放つ。翔はあまりの即答に面食らってしまう。
「な、なんでですか!?俺だって、せっかくの力を誰かの役に立てたいんです！フォニックゲインとか、聖遺物とかに関係してるなら、ノイズとだって……」
「八尺瓊勾玉は起動時の効果を見るにバリアのようなもので、ノイズから身を守るものだ。戦闘には向かない」
弦十郎が翔に近付いて言う。
「それに、いつでも発動できる訳ではないようだしな」
「ぐ」
翔は図星を指され、閉口する。
「我々も、武装のままならない一般人の君を危険な戦地に赴かせるのは反対なんだ。分かってくれ」
「……はい」
翔は目に見えて落ち込んだ。どんよりとした雰囲気が翔の周りに漂う。
「しかしまあ、一般人の避難誘導ならば可能かも知れんな。二課としても、慢性的な人員不足ってのは事実だからな」
弦十郎はぽりぽりと頬を掻いて呟くように言った。
「！じゃあ！」
「我々が精一杯サポートする。だから君は、ノイズから人々を守ってくれ」
弦十郎が翔の肩に手を置く。
「はい！俺、頑張ります！」
翔はそう言って嬉しそうに笑った。
「よし。じゃあ早速、八尺瓊勾玉の起動を自由にできるようにならないとな。了子君、頼んだぞ」
「お任せ～♪さ、こっちへいらっしゃい」
了子が翔を呼んで指令室を出て行った。

「はい！弦十郎さん、ありがとうございます！」
翔は源十郎にお辞儀をすると、指令室を去った。
「……仮面、か。こうして普通に対話していると分からんものだな」
（一体君は何を思い、何を感じて生きているんだ……？）
弦十郎は翔の出て行った扉を見つめて独りごちた。

☆

「……あの、これは？」
実験室。『了子専用??』と書かれた扉の中に入ると、翔は謎のマシンに固定された。磔と言っても差し障りない。
「八尺瓊勾玉は身を護る為の能力。つまり使用者の生存本能に起因すると私は考えました」
「いや、『考えました』って言われても……」
「という訳で、君を殺す気で攻撃するから頑張って起動させてね♪」
「鬼！悪魔！ルシファー！」
翔の必死の抗議は了子にとってどこ吹く風。了子は無情にも起動ボタンを押した。
ウィィィン……
「なんかヤバい音鳴ってますって了子さん！シャレにならないですよ！」
「そう。ノイズの発生地点に行くというのは、シャレなんかじゃ済まされないわ。シンフォギアを持たない君は、死ぬ気で行かないと決して生き残れない」
「！確かに……」
ビュオッ
翔の頭のすぐ横を、何かが高速で通過した。
ドゴン
直後、翔の背後で大きな衝突音が。

「……なんかスイカくらいの大きさの鉄球みたいなのが見えたんですけど」
「あら♪動体視力良いわね♪その通りよ」
「死ぬ！マジで死ぬから！せめてこの拘束だけでも解いて！」
「回避の訓練だと意味ないのよ。君は人を担いでる状態でいつもノイズの攻撃を回避できると思うの？」
「……分かりましたよ」
翔は大きなため息を吐き、鉄球をランダムに飛ばしている砲口を見る。
「あの時の、初めて起動した時のイメージを……」
呟くように唱え、鉄球が真正面から飛んでくるのを見据える。
（護るんだ！奏姉が護りたかったものを！）
ガキン
翔が意識を集中させると、前方に瑪瑙色のバリアが現れた。バリアは鉄球を弾き、勢いを完全に殺した。
「よし！この調子で……」
翔は四方から飛んでくる鉄球をバリアで防ぎ続けた。

☆

（……やはり、似ている）
瑪瑙色のバリアを目にした了子はそう思った。
（フィーネとしての能力の一つ。対物結界に酷似した能力……これは八尺瓊勾玉によるものなのか？それとも天城　翔自身の……？）
あれこれと思案を巡らせる了子だったが、その答えは今はまだ導き出されることはなかった。
（まあいい。いずれその力も利用させて貰う。我が野望の為にな……）
了子は僅かに口角を上げた。

☆

「……１０分経過」
了子がタイマーを見て知らせる。
「はぁ……はぁ……」
翔は肩で息をしていた。バリアを発動する度に、身体に疲労感がどっとのしかかる感覚を覚えた。
「ここまでみたいね。１０分ぽっちじゃ避難誘導どころか翼ちゃん到着まで間に合わないわよ」
了子は装置を止め、拘束機具を取り外した。
「はぁ……はぁ……クソッ！」
翔は悔しそうに拳を床に打ち付ける。
「最低でも３０分、良くて１時間は保たせないと実地投入は夢のまた夢ってところかしら？明日はもうちょっと頑張ってちょうだいね♪」
「はい……ありがとうございました」
翔は礼を言ってフラフラと実験室を出て行った。
（もっと力が欲しい……ッ！）
翔は悔しさを歩く気力に換えた。

☆

「あ、翼さん……」
指令室に挨拶に向かおうとすると、翼と目が合った。
「……話は叔父から聞いたわ。私は二課の皆さんを信頼してる。今更貴方一人が増えたところで何も思うことはないわ」
冷たく言い放って翼は指令室に入って行った。

「……負けるかーッ！」
翔は大声を出すと、了子の実験室へと駆け戻った。
その日は遅くまで特訓を続け、帰ってきたら母親にこってり絞られたそうな。

☆

（……私が苛立っている？）
指令室に入った翼は、先刻の自分の言動が苛立ちからくるものだったことに違和感を覚えていた。
（彼に……天城　翔にこの剣の心が揺さぶられている……？）
翼は首を横に振り、思考を止める。
（いいえ、あり得ない。確かに奏にそっくりな見た目だけれど、それが何だというの？彼は奏ではない。奏は、もういない）
翼は再び感情を打ち消し、冷たく鋭い剣となった。

☆

1週間後。夕方。
「よろしくお願いします！」
今日も今日とて翔は特訓に勤しんでいた。鉄球を四方から飛ばさなくても自在にバリアを張れるようになり、了子から課された持続時間をクリアすると、今度は移動しながらバリアを維持し続ける特訓に入っていた。
ちなみに部活は休部届を出した。顧問の先生はとても残念そうにしていたので、翔は少し心が痛んだ。
「……了子さん。ちょっと思いついたことがあるんですけど」

バリアを張りながらシャトルランを繰り返す翔。その表情はこの1週間で鍛えられたせいか涼しい。
「何かしら？言ってみて」
「このバリア……実は部分的に展開できるんじゃないかって」
「なるほど。確かにできるかも知れないでしょうけど、部分展開する必要があるのかしら？全面展開でここまでできるのだし、あとは実地訓練を積み重ねていけばきっと源十郎君も認めてくれるわよ」
「部分展開ってことは形を変えることができるってことでしょ？実際、翼さんのデッカい剣を止めた時は目の前だけにバリアを展開させた分、厚くて防御力も上がった訳だし。無意味って訳ではないと思うんですよ」
翔は次第に速くなるペースにも難なく食らいつく。
「そうねぇ……考えっていうのを聞いてみましょうか」
「このバリアで作るんですよ、俺もシンフォギアみたいな武器と鎧を」
「……難しいわね。バリアの変形なんて前代未聞過ぎて途方もない話よ。それに八尺瓊勾玉にはまだ分からない部分が多過ぎるわ。本当にできると思う？」
「できなきゃ、できるまでやるだけですッ！」
「！」
了子は翔の気迫に一瞬怯む。
「前を向くってことは、絶対に諦めないことなんです。分からない部分が多いってことは、可能性がたくさんあるってことでしょ？」
翔が強く言い放つ。シャトルランは終了し、翔はペースを落とした。
「……分かったわ。ただし！私のメニューだけは欠かさずやるようにね」
了子は優しく諭すように言った。
「はい！」
こうして翔の特訓メニューにバリアの変形が加わった。
しかしこれがまた難航を極めた。
「ぐぎぎぎ……」

必死に念じてバリアの形を変えようとするが、ビクともしない。
「そもそも変形というものがどんな方法で行われるかを見つけなきゃいけないわ。翼ちゃんの剣を止めた時のことを思い出して」
了子はいつもの白衣を脱ぎ捨て、真っ赤なジャージにタオルを首からかけた所謂野球部マネージャースタイルで特訓を見守っていた。黄色いメガホンで翔に呼びかける。
「あの時……あの時か……何が違ったんだろう?」
考え込むと、集中が切れてバリアが消えた。
「ほら!今ノイズに襲われたらひとたまりもないわよ!」
パシーン
了子が翔の肩を竹刀で叩く。
「ッ!はい……」
翔は痛みに体を強張らせ、また集中し直した。
「変形以前に、いつもどんな形でバリアを出してるか把握してみなさい。元の形が分からないことでは、変形も何もあったものじゃないわよ」
「なるほど……。っていうか了子さんいつもとキャラが違うような」
「細かいこと言ってんじゃないの!ほら、練習練習!」
了子はそう言って首にかけてあったホイッスルを吹いた。
「なんか熱血モード入ってるし……やるしかないか……」
こうして翔と謎の熱血スイッチが入った了子との特訓は続き、気がつけば一ヶ月を過ぎようとしていた。

☆

「うひゃあああッ!?」
「あー……駄目だこりゃ」
一ヶ月後。二課指令室。
モニターでノイズと交戦している響を見て、翔はため息を吐いた。

交戦というよりは逃げの一手で、ノイズが自滅してくれるのを良いことにひたすら逃げ回っていた。
「一ヶ月経っても、何も変わらんか」
弦十郎も深いため息を吐いた。
ちなみに今回翔の出動要請は無かった。
無人の公道にノイズが発生したため、交通整理のみで済むらしい。
「そりゃあ逃げ回ってるだけですし。戦闘訓練を受けてない一般の女子高生に頼むには無茶だったんじゃないですか？」
「翔君も人のこと言えないでしょ」
「う。俺はまあ……逃げ専門だからいいんですよ」
「響ちゃんや翼ちゃんみたいに闘いたいんじゃなかったの？」
「アーアーキコエナーイ」
「……ふんっ！」
了子のハイキックが翔の脳天を打ち抜く。
「……すいませんでした。本当は特訓が上手くいってないだけなんです」
翔は立ち上がって埃を払うと沈んだ声を出した。
「バリアの変形とか何とかって奴か。まあ無理はするな。まずは出来ることを完璧にできるようになってからだ」
弦十郎はそう言って翔の頭に手を置いた。
「はい……分かってます。それじゃ、訓練に戻りますね……」
翔はそう言って指令室を出て行った。
「かなり落ち込んでるみたいね、彼。基本メニューはこなせてるからいいんだけど……」
「その内支障が出るかも知れんな……よし！」
弦十郎は立ち上がり、指令室を出ようとする。
「弦十郎君？」
「悩める若者に手を差し伸べてやるのも大人の仕事だ」
そう言う弦十郎の顔には、自信に満ちた笑顔を浮かべていた。

第5章　嘘つきでも、前を向く

「……」

了子の実験室。翔は瞑想のように目を閉じて鎮座している。周りには瑪瑙色のバリアがドーム状に展開されていた。

（よし！バリアの基本形態は把握できた。あとはこれを……）

翔が自分とバリアのイメージを脳内に浮かび上がらせ、バリアの形を変化させようと試みる。が、実際のバリアは全く変化を見せない。

「また駄目か……。もう一回！」

「大分苦労してるみたいだな」

実験室の扉が開き、弦十郎が翔に声をかけてきた。

「弦十郎さん。はい、駄目なんです。何回やっても……」

「まあそう気を落とすな。一人ではできない、というだけかも知れんだろ？俺も協力してやる」

弦十郎はそう言ってネクタイを緩めた。

「ありがとうございます。でも、協力ったって何を……？」

「翔君。バリアは張ったな？」

弦十郎は右腕を腰の位置まで落とし、後ろに引く。

「ま、まさか……」

バギィィィン

弦十郎の正拳突きがバリアにクリーンヒットし、砕け散った。

（に、人間じゃねえ……）

「これくらいは防げるようになってもらわんとな。ほら、次行くぞ！」

「くっ！」

（前だけにバリアを……）

「覇ッ！」

ビシッ　バギィィィン

一瞬亀裂が走るのが遅れるが、バリアは脆くも崩れ去る。

「よし！次は５０％の力で行くぞ！」

「今のが全力じゃないのか……燃えてきた！」

こうして弦十郎との特訓は二課の活動報告が始まるまで続いた。

それからはほとんど進歩しなかったものの、翔の雰囲気は元の明るいものに戻っていった。

☆

「じゃあまた明日な！」
翌日の放課後。翔は靡と別れて教室を出ようとする。
「翔ってば、最近放課後はすぐどっか行っちゃうね」
靡が引き止めるように翔に問いかける。
「部活も休んでるみたいだし、まさか彼女とか……？」
「バーロー。そんなんじゃねえよ。詳しくは言えねーけど、大事なことなんだ。俺にとっても、他の皆にとってもさ」
そう言う翔の目は、どこか遠いところを見ていた。
「そっか……。よく分かんないけど、翔が頑張ってるなら邪魔しちゃ悪いよね。ゴメンね、引き止めちゃって」
靡はそんな翔の姿を見て、疚しいことではないことを直感的に確信した。
それと同時に、翔がどこか遠いところへ行ってしまうような気がして、胸に靄がかかるような感覚を覚えた。
「おう。んじゃな！」
翔が笑顔で走って行くのを、靡はしばらく見送っていた。

☆

「～♪」
二課へ向かう道中。翔はウォークマンで音楽を聴いていた。聴いているのはツヴァイウイングの【逆光のフリューゲル】だ。翔はツ

ヴァイウイングのユニット結成時からのファンで、ＣＤもシングルやアルバムに関わらず全て買っている。傍から見ればかなりコアなファンだろう。
リズムを口ずさみながらリディアンへと向かう。
「ん？立花さん……か？」
リディアン前にある自然公園のベンチに響が座っていた。独りで静かに俯いている。
「よ。どうしたの？」
翔はイヤホンを外し、響に話しかけた。
「あ、翔さん……。なんでもないですよ！平気、へっちゃら、です……」
一瞬強がって見せた響だが、空元気はすぐに消え失せた。
「何か悩みごと？俺でよかったら話聞くけど……」
そう言って翔は隣に腰掛けた。
「えっと。私の友達に小日向　未来って娘がいるんです。誰よりも仲良しで、私の一番の親友なんです」
そう言う響の顔は誇らしげだった。
（本当に大切な友達なんだな……）
「でも私、シンフォギアのこととか、ノイズと闘ってることとか、未来に隠し事ばっかりしてて……未来に申し訳ないなあって」
響は苦笑すると、また押し黙ってしまった。
「……羨ましい」
「……え？」
翔の呟きに、響は思わず聞き返す。
「そうやって、隠しごとするだけで心を痛められるような友達がいて、立花さんが羨ましいよ。俺にも友達はいるけど、二課のこととか隠してても全然申し訳ないなんて思えないもんな。その未来って娘は、立花さんにとってかけがえのない親友なんだね」
「はい！未来は私にとって帰る場所で、とっても暖かい陽だまりなんです！」
響はそう言って明るく笑った。
「なら、護らないとな。大切な友達を。帰る場所を。その為の隠しご

とならしょうがないんじゃないか？人を護る嘘ってのもあるんだよ」
「はい……。頭では分かってるつもりなんですけど……」
響の表情に再び陰りができる。翔は昔の自分を見ているようで、なんだか放っておけなくなった。
「それでも、前を向け」
「？」
「奏姉が俺によく言ってた言葉なんだ。辛くたって、悲しくたって、とにかく前を向け。そうすれば、いつか必ず上手くいく、って」
翔は胸元からペンダントを取り出し八尺瓊勾玉を掌に乗せた。
「俺は前を向けたからここまで来れた。奏姉がこの言葉を教えてくれたから俺は……立花さんにも会えた。ノイズから皆を護るっていう、奏姉の生き様を継ぐことができた。だから、立花さんも前を向いてくれよ。お陰様で、誰かが前を向いてないだけで落ち着かない性格になっちゃってさ」
そう言って翔は響の前に立ち、手を差し出した。
「……はい！私、頑張って前を向いてみます！」
響は翔の手を取った。
（温かい……）
翔の笑顔が、響にはとても暖かく思えた。
「あ、そうだ！今度未来と一緒に琴座流星群を見る約束をしてて……」
そう言う響の顔には、いつもの笑顔が戻っていた。翔は響としばらく雑談し、再びリディアンを目指した。

☆

二課の本部に着いた翔は、了子の実験室を借りて特訓を再開しようとした。しかし。
「立入禁止……？」
了子の実験室の扉には、『立入禁止』と書かれた張り紙が貼ってあっ

た。
「ちょーっと特別な実験をしててね♪しばらくは入室禁止よ」
「そ、そんなあ。俺の特訓は？」
「弦十郎君にでも頼んだら？それじゃ、私は忙しいから♪」
そう言って了子はそそくさと実験室に入って行った。
「……という訳なんですけど」
翔はすぐさま指令室にいた弦十郎に相談を持ちかけた。
「なるほど。なら、ウチに来るか？」
「弦十郎さんの家に？まあ、特訓ができるならどこでもいいですけど……」
「ウチは広いからな。体を動かす場所もある！なんならしばらく泊まっていけ！」
「ええ!?いや、それは流石に……」
「遠慮はいらん！部屋も空いてるし、二人には少し広すぎるくらいだからな」
（二人……？あ、奥さんか）
「泊まるかはともかく、特訓できるなら喜んで行きますよ！」
「よし！ならついてこい！藤堯！しばらく頼む！」
弦十郎はそう言って翔を連れて指令室を出て行った。
「全く。相変わらず思いついたら居ても立っても居られないんですから……」
そんな藤堯の言葉は弦十郎の耳には届かなかった。

☆

「覇ッ！」
ガィィィン
弦十郎の拳を翔のバリアが受け止めた。
「やるな！」

「はい！でも、バリアの強弱を調節できるようになっただけで、まだ変形って感じじゃないですね……」
「気を落とすな。強力な攻撃への対抗策ができたんだ。だが、弱点もある」
　強い踏み込みの音が聞こえ、翔は咄嗟に弦十郎の方へバリアを集中させた。
「こっちだ！」
「後ろ!?」
　翔の背後に回った弦十郎の肘打ちによって翔のバリアは砕けた。
「バリアを集中させるってことは、他の部分が脆くなるってことだ。無駄に集中させれば、それだけリスクも高まる」
「なるほど……一長が出れば、一短も顔を見せるって訳ですね」
「そうだ。変形に至っては、バリアで護れない箇所を作るかもしれないということを忘れるな！」
「押忍ッ！」
　弦十郎と翔の特訓は夕方まで続いた。辺りは夕焼けを越え、次第に紫雲が空を覆いだした。
「もうこんな時間か……。弦十郎さん、俺この辺で……」
「水臭いこと言うな。泊まってけ！」
「でも……」
「明日は土曜日だ。一日中特訓できるぞ！」
「……分かりました。お言葉に甘えます」
　翔は弦十郎の食い下がりに顎を出した。着替え等を取りに戻り、その後もうしばらく特訓を続けた。そして。
「今日はこのくらいにしておくか」
「はあ……はあ……ありがとうございました」
　翔はそう言うと片膝を突いた。
「流石に2時間ぶっ通しは疲れたろ。俺は藤堯に連絡することがあるから、先に風呂浴びてこい」
「じゃあ、お言葉に甘えて」
　翔はそう言って風呂場へ向かった。玄関で靴を脱ごうとしたとこ

ろで、女性ものの靴を見つけた。
（多分弦十郎さんの奥さんだな。挨拶くらいはしておくか。いや、汚い靴下と服で家をうろつかれるのは迷惑だろうか？先にお風呂をいただこう）
翔は頭の中で行動を決めると、着替えを持って脱衣所に向かった。
（漫画とかアニメならここでばったり裸の奥さんと……なんて展開になるだろうが、俺はそんなドジは踏まないぜ！）
翔はしっかり扉をノックし、反応がないのを確認して更に浴場の電気が点いていないことも確認した。
「ふふん。これで気兼ねなく風呂に入れるってモンだ」
翔はいそいそと服を脱いで洗濯機に投げ入れ、浴場の電気を点けようとした。その時、
ガラガラ
脱衣所の横引き戸が開かれる音がした。
「……え？」
自分の抜け目なさに酔いしれていた翔の思考から熱が引く。
「……」
扉の先には、翔を見たまま固まっている翼の姿があった。
（翼さん!?なんでここに!?もう一人って弦十郎さんの奥さんじゃなかったのか!?まあ確かに弦十郎さんの仕事柄妻帯するとフラグになったり実質的に家族に負担がかかったりするし優しい弦十郎さんがそんなことを避けるために妻を持たないのは論理的にも簡単に行き着く結論な訳でってそんなこと考えてる場合じゃなくて状況の整理をしよう。俺今全裸翼さんガン見、ＯＫ？全然ＯＫじゃねえよ！えっと……とりあえず、とりあえず……）
「キャーー！翼さんのエッチ！」
翔は翼に騒がれる前にこちらが騒ぐ、先手必勝の作戦に出た。
「あ、ご、ごめんなさい！」
翼は我に返ると真っ赤な顔で脱衣所の扉を閉めた。
（し、しまった！見ることは防げても、見られることは想定してなかった！）

☆

少し前。

「ただいま帰りました」

翼は我が家の扉を開ける。いつも通り誰もいない家。叔父の弦十郎は二課の仕事で忙しく、自分より早く帰ってくることはほとんどなく、帰ってくるのが夜中になることも少なくない。と言っても、ホームドラマに良くあるような不平不満を翼は持ち合わせてはいなかった。

弦十郎は人々を護る為に命懸けで働いている。そのことはむしろ翼にとって誇りであった。

(今日は事務所でシャワーを浴びてきたし、お風呂の前に軽く一汗かくのも良いわね)

翼はそう思って部屋に荷物を置き、着替えようとした。しかし、部屋中探しても運動用のジャージが見つからない。

(しまった。ジャージは洗って脱衣所に置きっ放しだったわ。私としたことがだらしのない……)

翼は脱衣所に向かい、扉を開けた。

(灯り……?)

訝しんだ翼は、そこで驚きの光景を目の当たりにした。なんとそこには全裸の翔がいるではないか。

「……え?」

「……」

何故誰もいない筈の脱衣所の灯りが点いているのか。

何故翔がここにいるのか。

何故堂々と風鳴家のお風呂を使おうとしているのか。

様々な疑問が翼の処理能力を超えて膨れ上がった。

(落ち着くのよ風鳴　翼!冷静に状況を分析すればこの程度の非常事

態は物の数ではないッ！冷静に状況を分析……分析……）
翼は分析と銘打って翔の体を見た。
顔、肩、胸、腹、腰、そして……。
「キャーー！翼さんのエッチ！」
打ち合わせでもしたかのようなタイミングで翔が叫んだ。その声は屋敷中に聞こえるのではないかという程に響き、翼を我に返した。
（やだ、私ったら何を……!?）
「あ、ご、ごめんなさい！」
翼は急いで扉を閉めた。瞬間的な緊張が解け、そのまま扉に背中を預ける形でへたり込む。

☆

「まさか、人がいるなんて思わなくて。しかもそれが天城だとは……」
「いや、こっちもまさか見られるイベントがあるとは思わなくて……」
しばらくして風呂から上がった翔は謝罪の為に居間にいた翼と遭遇した。翼は翔を見つけるや否や土下座の姿勢で謝った。
「とりあえず頭上げて下さいよ翼さん。冤罪で世界のトップアーティストの額を地に着かせたとあっちゃあ明日からお天道様の許を大手を振って歩けませんから！」
どうにかこうにか翼を説き伏せ、今回は事故で、お互いに過失は無かったということで決着がついた。
「何騒いでるんだお前ら？」
玄関から弦十郎の声が聞こえた。
「な、なんでもないです！」
翔と翼は明らかに狼狽えた声を出した。
「？」
弦十郎は頭に疑問符を浮かべたが、気にしないことにした。
「そうそう。さっき緒川から連絡が来てな。本部に直接来て確認して

欲しいことがあるらしい。という訳で帰りが遅くなると思うから、お前ら二人で先に夕飯食っててくれ」
「は、はいッ！」
「分かりました！」
『二人』という単語に強く反応したのか、翔と翼の顔はみるみる赤くなっていった。
「？本当にどうしたんだ？翼まで取り乱して珍しい……」
「なんでもないですッ！」
「お、おう。ならいいが」
　弦十郎は二人の気迫に気圧され、終始訳の分からないままとりあえず二課本部へと向かった。
「……」
（つ、翼さんと……）
（天城と……）
（一つ屋根の下……か）
　その後の夕食は、まるでお通夜のように静かだったという。

☆

「～♪」
　リディアン音楽院：響の寮室。響は追試免除の為のレポートを書き上げながら鼻歌を歌っていた。
「どうしたの？鼻歌なんか歌ってご機嫌ね？レポート書いてる時はいっつもお腹空いてる時みたいな顔してるくせに」
　響のルームメイトで親友の小日向　未来がテーブルに紅茶の入ったマグカップを二つ置く。
「未来～」
　響は嬉しそうな顔で未来に話しかける。
「なぁに？何か嬉しいことでもあったの？」

「ううん。えっとね、流星群絶対見ようね、未来！」
響はそう言って楽しそうに追試のレポートの筆を進めた。
「……うん！さ、早くレポート書いちゃいなよ」
「うん！～♪」
「おかしな響……ふふっ」
そういって未来は微笑んだ。響が自分との約束を守る為に頑張っている。当たり前のことだけど、その当たり前のことが未来には嬉しくてたまらなかった。

第6章　弱くても、前を向く

数日後。
翔と弦十郎の特訓は実を結びつつあった。
「ハァッ！」
「でりゃあッ！」
弦十郎の渾身の正拳突きは翔の右手に防がれた。防いだ翔の右手は真っ赤なバリアで覆われている。
「中々様になってきたじゃないか！」
「はい！とりあえず、限りなく一部に集中させることはできました」
右手のバリアは密度が上がっているせいかとても色が強く、グローブやバンテージのように手の形にフィットしている。
「いいぞ！おまけに体術の稽古もつけてやるからな！気合い入れていけ！」
「押忍ッ！」
翔は弦十郎の熱気にすっかり当てられ、少年漫画の主人公のようにひたすら特訓に明け暮れた。
「心なしか顔つきも良くなってきたな？どうだ？モテるだろ？」
「月一だったラブレターが週一になる程度には」
冗談めかした弦十郎の問いに、翔は真面目に答えた。
「ハッハッハ！思ったより人気者だな！」
「でも、俺にはノイズから皆を護る役目があるから……」
翔が動きを止めるのを見て、弦十郎も構えを解く。
「俺なんかを好きになってくれるのは嬉しいんですけど……やっぱり、申し訳ないって言うか、俺はその人を好きになれないって言うか。……俺の好きな人は、今も昔も変わらないから」
翔は弦十郎に聞こえないような声で呟いた。
「……ふ。贅沢な悩みだ、ソレは」
「話が逸れましたね。特訓を再開しましょう」
翔が再び構える。
「おう！行くぞ！」

ｐｒｒｒ……ｐｒｒｒ……
二人の勢いを削ぐように弦十郎の携帯が鳴った。
「俺だ。……分かった。ああ、目の前にいるよ。すぐに向かう」
そう言って弦十郎は携帯を切り、翔の方に向き直る。
「悪いが、修行は中止だ」
「なんかあったんですか？」
「了子君が八尺瓊勾玉に関して新しい発見をしたらしい。これから確認に向かうから、君にもついてきてもらうぞ」
翔は頷き、弦十郎に続いて二課の指令室へ向かった。

☆

指令室に着くと、響と翼を除く二課のメンバーが二人を出迎えた。
「久しぶりね翔君。ちょっと見ない間にイイ男になったんじゃない？」
了子は翔と目が合うなり早速絡んできた。
「そ、そうなんですか？弦十郎さんにも言われたけど、俺自身あんま自覚無くて……」
「そういうもんなのよ。さ、早速本題に入るわね」
了子はそう言って真剣な表情でディスプレイに映像を映し出した。ディスプレイには先日見た八尺瓊勾玉のデータが浮かび上がる。
「八尺瓊勾玉はその名の通り勾玉。なんだけど、とうやらそれ単体では本来の性能を発揮できないみたいなの」
「本来の性能……？あの赤色のバリアは本来の性能じゃないのか？」
弦十郎が尋ねると了子は頷き、次の画面を映した。
「八尺瓊勾玉は三種の神器の一つ。天叢雲剣、八咫ノ鏡の二つと揃って初めて真の力を発揮できるという説が、私の研究の中で導き出された結論よ」
了子が示した画面には、剣のシルエットと丸い鏡のシルエットが八

尺瓊勾玉と強く反応を示すエフェクトが表現されている。
「あれでまだ１００％じゃなかったのか……」
翔はペンダントの八尺瓊勾玉を見て、内心興奮に打ち震えていた。
「それで、残りの二つの行方は……？」
弦十郎の問いに、了子は首を横に振る。
「ぜーんぜん分からないわ。どこにあるのか、誰が持ってるのかもね」
「……そうですか」
翔は残念そうに目を瞑る。
「気を落とすことばかりじゃないわよ。三位一体の完全聖遺物なんて歴史的な大発見だし、実際起動には他の完全聖遺物の三分の一程度のフォニック・ゲインで良いから、燃費は凄くいいわよ。それこそ翔君がたった数日で使いこなせる程度にはね」
「……」
「ここまで使いこなせたのは翔君の努力あってこそだがな」
落ち込む翔を励ますように、弦十郎は翔の背を軽く叩いた。
「……ありがとうございます」
その場に少し沈黙が流れる。
「八尺瓊勾玉について分かったことはそれだけじゃないわ。むしろ次が大本命なの。これは驚くわよ～！」
了子が空気を変えるようにキーボードを叩いて画面を進める。
「!?これは……！」
翔はディスプレイに食い入るように見入った。ディスプレイには、勾玉が槍や剣へと姿を変化させる映像が流れている。
「八尺瓊勾玉のもう一つの効果。それは『模倣』、つまり既存の聖遺物の性質や形を真似ることができる性質」
ドクン
翔の心臓が強く脈打つ。
「本来は勾玉単体だとフォニック・ゲインを溜め込むだけで武器や防具としては意味を成さないの。さっき言った二つの聖遺物の起動を補助する道具として存在していたからね」
ドクン

「それを考慮してか、八尺瓊勾玉単体の性能として様々な武器に形を変えたという事実が様々な文献で報告されているわ」
「しかし、翔君が使っているバリアのようなものは……？」
「恐らくだけど、八尺瓊勾玉が直前に模倣していた聖遺物の性質か、翔君が他の聖遺物をイメージできずにフォニック・ゲインの塊が半ば暴走する形で現出していたと考えるのが妥当ね」
　ドクン
　翔は鼓動が大きくなるのを感じ、胸の辺りを掴む。
「ってことは……俺が正確な聖遺物のイメージを掴むことができたら……？」
「ご明察の通りよ。ガングニールを、奏ちゃんの力を使えるわ」
　ドクン！
　心臓が一際強く跳ねるのを翔は感じた。
「……了子さん！俺！」
「はいはい分かってるわ。その為の効率的なプログラムももう組んであるわよ」
　強く迫る翔を宥めるように了子はＵＳＢをチラつかせた。
「……あ、あれ？おかしいな」
　翔は視界が歪むのを感じ、自分が涙を流していることに気付いた。
「！」
　弦十郎が思わず目を見張る。
「俺、泣くつもりじゃ、無かったのによ……。う、うぅ……」
　涙が止まらない。唇が痙攣して呻き声のような音が漏れる。
「感激するのはまだ早いわよ。模倣には、八尺瓊勾玉の起動以上のフォニック・ゲインが必要になってくるわ。それに、相当量のイメージトレーニングもね」
「……押忍ッ！」
　翔は涙を拭って力強く答えた。
（これで、奏姉に近付くことができる！前に進めるんだッ！）
「そのためには、翼ちゃんや響ちゃんの歌をたーっぷり聞かないとね、弦十郎君？」

「……ああ。そろそろ使い物になってきたことだしな」
弦十郎はニヤリと笑い、翔の頭に手を置いた。
「??それってどういう……？」
弦十郎は翔の正面に立って咳払いを一つした。
「天城　翔君。君を特異災害対策機動部二課の職員として、正式に入隊をお願いしたい。俺たちと一緒に、ノイズから人々を護ってくれないか？」
弦十郎はそう言って手を差し出した。
「……」
翔は呆気に取られたまま差し伸ばされた手と弦十郎の顔を交互に見た。
「俺たちには、君の力が必要だ」
「ッ！」
翔は、久しぶりにその感覚を思い出した。
誰かに必要とされる。誰かが自分の力を認めてくれる。様々な感情が渦になって翔の心を埋め尽くした。
「……はいッ！よろしくお願いしますッ！」
手を握る。力強く握り返された。
その場に小さな喝采が沸き起こる。
「おめでとう翔君！」
「改めて宜しく！」
「おめでとうございます！」
友里、藤堯、緒川も拍手をしている。
「ノイズと対峙するというのは、ノイズから人々を避難させることよりも数倍危険なことだ。了子君の特訓と共に、俺も組手で稽古してやる。覚悟しとけ！」
「押忍ッ！」
翔は深々とお辞儀をした。
（奏君の名を出した途端にこの感情抑制の欠如……。なんとなく仮面の継ぎ目が分かってきたぞ……）
弦十郎は冷静に翔の変化を捉え、一人考察に耽る。

☆

「つ、疲れた……」
翌日。放課後の教室で翔は机に突っ伏して天日干しのように項垂れていた。
「了子さんと弦十郎さんのダブル特訓……。体が保たねえよ……」
「うわ！翔どうしたの？」
死人のように動かない翔を見兼ねて靡が声をかける。
「うーん。いや、なんだ。色々と疲れててな。詳しくは言えないんだけど……」
「そうなんだ。ま、いっか。顔色は悪くないし、いつもよりイキイキしてるもんね」
靡はそう言ってニッコリと微笑む。
「ね。今夜暇？何年に一度かの流星群が見れるらしいんだけど」
「流星群……？」
翔はその単語に聞き覚えがあった。思い出そうと記憶を探ってみるが、立て続けの特訓に押し潰されて検索を断念した。
「忙しかったらいいんだけど。気分転換も必要かなって思って」
「そうだな……。確かにここのところずっと特訓続きだったし、靡の言う通りかもな。ちょっと待っててくれ」
翔は立ち上がって携帯を取り出し、教室を出た。
「……」
（バイトとかなのかなあ？家計が苦しいとか？でも、そんな感じじゃないし……）
独り教室に取り残された靡はアレコレと思考を巡らせる。
（奏さんが亡くなってから大分経つけど、翔ずっと無理してきてる。私には分かるもん。その翔が、ぐでーってなってるけどいつもより楽しそうな顔してる……。なんだか知らずに置いてかれちゃうみたい

でちょっと怖いな……）
　靡は翔の境遇を知り、間近で翔を見てきたが故に最近の翔の変化を嬉しく思った。反面、翔だけが変わっていくことに、少し物寂しさも感じている。
「お待たせ。今日は大丈夫だぜ」
　電話を終えた翔が教室に戻ってきた。
「本当!?やったあ！」
　靡は飛び跳ねて喜んだ。
「なんだよ?そんなに流星群見たかったのか?変な奴……」
　翔は無邪気に喜ぶ靡を見て、思わず笑みが零れた。
（まるで立花さんみたいだな……ん?立花さん……流星群……そっか）
　翔は記憶の奔流から答えを見つけ出し、合点した。
「夜までまだ時間あるし、どっかで時間潰そうよ！こないだ駅前にできたパン屋さんがいい感じで……」
「はいはい。パン屋は逃げねーからゆっくり行こうぜ」
（懐かしいな、この感じ）
　翔は久々の日常に身を溶かしていった。

☆

　リディアン職員室前。
「響まだかな……?」
　職員室前の廊下を、未来は右往左往していた。しばらくして職員室の扉が開き、響が出てきた。
「どうだった!?」
「壮絶に字が汚いってー。まるでヒエロなんちゃらみたいだって」
「じゃなくて、結果は?」
　未来の問いかけに、響はピースサインで答えた。

「ギリギリＯＫだって！これで流星群見れるー！」
「コラ立花！廊下で騒ぐな！」
職員室から担任の怒鳴り声が響く。
「えへへ……怒られちゃった」
響は舌を出して後頭部を掻いた。
「うふふ。鞄教室でしょ？持ってきてあげる」
未来はそう言って教室に戻ろうとした。
「あ、いいよ！自分で……」
「響は頑張ったから、そのご褒美！」
未来はそう言って嬉しそうに手を振った。
ｐｉｒｉｒｉｒｉｒｉ……ｐｉｒｉｒｉｒｉｒｉ……
「！」
響の携帯から、不穏な着信音が鳴り響いた。

☆

「ノイズが!?」
電話越しに翔が叫ぶ。
「？」
靡はパンを咥えながら翔の後ろ姿を見ていた。
「はい、はい……。分かりました。幸い近くにいますので。すぐに向かいます」
翔は電話を切り、ため息を吐いた。
「悪い、靡。ちょっと急用が入っちまって……」
「！そっか……」
靡は目を伏せる。
「本当にスマン！また埋め合わせするから！」
「い、いいよ別に！翔の気分転換になればって思っただけだから……」
「そ、そっか。悪いけど急ぐわ。あ、あとリディアン前の自然公園の地

下鉄駅近くには寄るなよ！ノイズが出てるらしいから」
それだけ言って翔は駆け出した。
「……なんでそんなこと知ってんだろ？」
独り残された靡はぽかんと口を開けていた。

☆

「もしもし、弦十郎さん!?」
現場へと走りながら、翔は弦十郎に電話をかけた。
「どうした？何か問題か？」
「いえ！ただ、立花さんも呼んだのかって……」
翔は響とその親友との約束を思い出していた。
「ああ、呼んだが……」
「今すぐ要請を解除して下さい！ここは俺一人でなんとかします！」
「な!?何を考えてる!?翼だって到着に十分以上かかると」
「立花さんには、守らなきゃならない約束があるんです！でも立花さんは、きっとそれを反故にしてまでも駆けつけます！それじゃ駄目なんだ！」
翔の迫力に弦十郎は一瞬面食らう。
「し、しかし……やれるか？」
弦十郎は言葉を飲み込み、覚悟を決めた。
「やってみせます！俺の全てを賭けて！」
「！……分かった。但し条件が一つ。絶対に生きて帰ってこい！」
「押忍ッ！」
それだけ言って翔は電話を切り、急いで響にかけ直した。
「もしもし立花さん!?」
「あ、翔さん！ノイズが……」
「ああ！ここは俺と翼さんでなんとかするから、立花さんは安心して流星群見に行ってくれよ」

「なっ!?馬鹿なこと言わないで下さい！二人を放って私だけそんなこと……」
「親友との約束ってのはそんなに簡単に破れるもんなのかよ!?」
「！」
　翔は立ち止まり、通話に集中した。
「人助けをしたい気持ちは分かる。誰かが危険だと分かっていながら、何かに集中することなんてできないのも分かってる！それでも、君は前を向け！ノイズなんかに大事な約束を破られてたまるか！君は君のやるべきことをやるんだ！」
「……翔さん。でも……」
「信じてくれ。俺と翼さんを」
「……できません！やっぱり、誰かを置き去りにして得た幸せは、偽物な気がするんです！だから！」
　そこまで聞いて翔はハッと顔を上げた。目の前には肩で息をしながら携帯を片手に持つ響がいた。
「私も一緒に闘いたいんです！」
　Ｂａｌｗｉｓｙａｌｌ　Ｎｅｓｃｅｌｌ　ｇｕｎｇｎｉｒ　ｔｒｏｎ……
　響の歌声に反応してシンフォギアが起動する。
「はあー……分かったよ。んじゃ、５分で終わらせる方向で」
　響は頷き、ノイズがいるであろう地下鉄駅のホームへと降りて行った。翔も続いて飛び降りる。
「絶対に……離さない　この繋いだ手は」
　階下では大量のノイズが響達を待ち構えていた。
「こんなにほらあったかいんだ　ヒトの作る温もりは　難しい言葉なんて要らないよ　今、分かる　共鳴するＢｒａｖｅ　ｍｉｎｄ！」
　響はノイズの群れに遮二無二特攻する。翔は八尺瓊勾玉のバリアを極限まで両手に集中させ、ノイズを殴り倒していく。
「ずっとずっと漲ってく　止め処なく溢れていく　紡ぎ合いたい魂
１００万の気持ち　さあ！ぶっ飛べこのエナジーよ！」
（今までの立花さんと違う。体捌きとかはまだたどたどしいけど、そ

れでも軸がしっかりしてる。こりゃ足を引っ張るのは俺の方かもな）
「開放全開！いっちゃえＨＥＡＲＴのゼンブで　進むこと以外答えなんてある訳がない」
　二人は次々とノイズ達を炭へと還していく。すると、奥で激しい爆発音がした。
「なんだ!?爆発？」
　翔が音のした方へ向かうと、異形のノイズがそこにいた。羊のようなフワフワとした輪郭。大粒の葡萄のようなピンク色の球がいくつもくっついている。
「お前がボスか。覚悟しやがれ！」
　翔は葡萄ノイズに突っ込む。
「待って翔さん！なんだか嫌な予感が」
　葡萄ノイズの一粒が地面に落ち、翔の方に転がった。
「！」
（なんかヤベェ……）
　翔は直感的に脅威を察知し、転がった球の方にバリアを集中させた。
　ドゴオオォォン
　凄まじい轟音と共に翔が後方へ吹き飛ばされる。
「翔さん！」
　響が壁に激突した翔に駆け寄った。
「俺は、大丈、夫……。それよりノイズを」
「全然大丈夫じゃないです！だって、血が……」
　翔は後頭部をコンクリートに打ち付けたらしく、壁にドロリとした血が滲んでいた。
「こんなもん、なんてことない！早くアイツを……」
　葡萄ノイズはその粒を次々と地面に落とし、翔達に転がした。
「！マズい！」
「のわっ!?」
　翔は響を抱き寄せ、バリアを張り直した。直後に凄まじい衝撃が体全体を打つ感覚に襲われる。

「……ッ！」
（護、る……ッ！）
朦朧とする意識の中で、翔はそのことだけを考えた。

☆

「……ん？俺は……？」
「気が付いたんですね！良かった……」
翔が目を覚ますと、自然公園の芝生の上で寝転がっていた。ノイズの姿は無く、代わりに翼がこちらを覗き込んでいた。
「翼さん……。そっか。翼さんがあのノイズを……」
「立花に感謝することね。気絶した貴方を必死に護りながらここまで運んだのだから」
翼は冷たく言い放つ。
「ともかく目が覚めて良かったです！さあ、病院に行きましょう！」
響は翔を抱き起こし、肩を担ぐ。
「……立花。それと天城」
翼が二人を睨む。
「貴方達はノイズ討伐の任を離れなさい」
「なっ……」
「なんで……」
二人は聞き返した。
「このままでは命を悪戯に削るだけ。強大な敵が現れた時、命を落とし兼ねないわ」
翼は二人に背を向けた。
（もう犠牲者は出さない……。奏、私は片翼だけでも飛んでみせるッ！）
「私にだって……」
響が俯いて泣き出しそうな声で呟く。

「私にだって、護りたいものがあるんですッ！それはなんでもない日常で、私の絶対に帰る場所で……」
「なんでもない日常？帰る場所？」
突然響いた声に、三人は辺りを警戒した。
「欠伸も出ねぇ程眠てぇこと言ってんじゃねぇ！」
森の茂みからこちらに歩み寄る人影が一つ。
「あれは……シンフォギア？」
翔は人影が月明かりに照らされた姿を見た。同い年くらいの少女が、真っ白な鎧に身を包んでいる。
「馬鹿な!?あれはネフシュタンの鎧!?」
（奏の最後の歌と引き換えに起動した完全聖遺物……。なんという残酷な運命だろう）
翼は一人合点のいった顔で謎の少女を見つめた。
「あるお方からの命令でな。そいつらを奪いにきたんだよ」
少女は翔と響を指差して言い放った。
「俺たちを……？」
「奪う……？」
「そんなこと、私がさせると思うの？」
翼は剣を構える。
「さあな。まずは一筋縄でいくかどうか……試させて貰う！」
謎の少女が翼と剣を交えた。